丁丑雜記

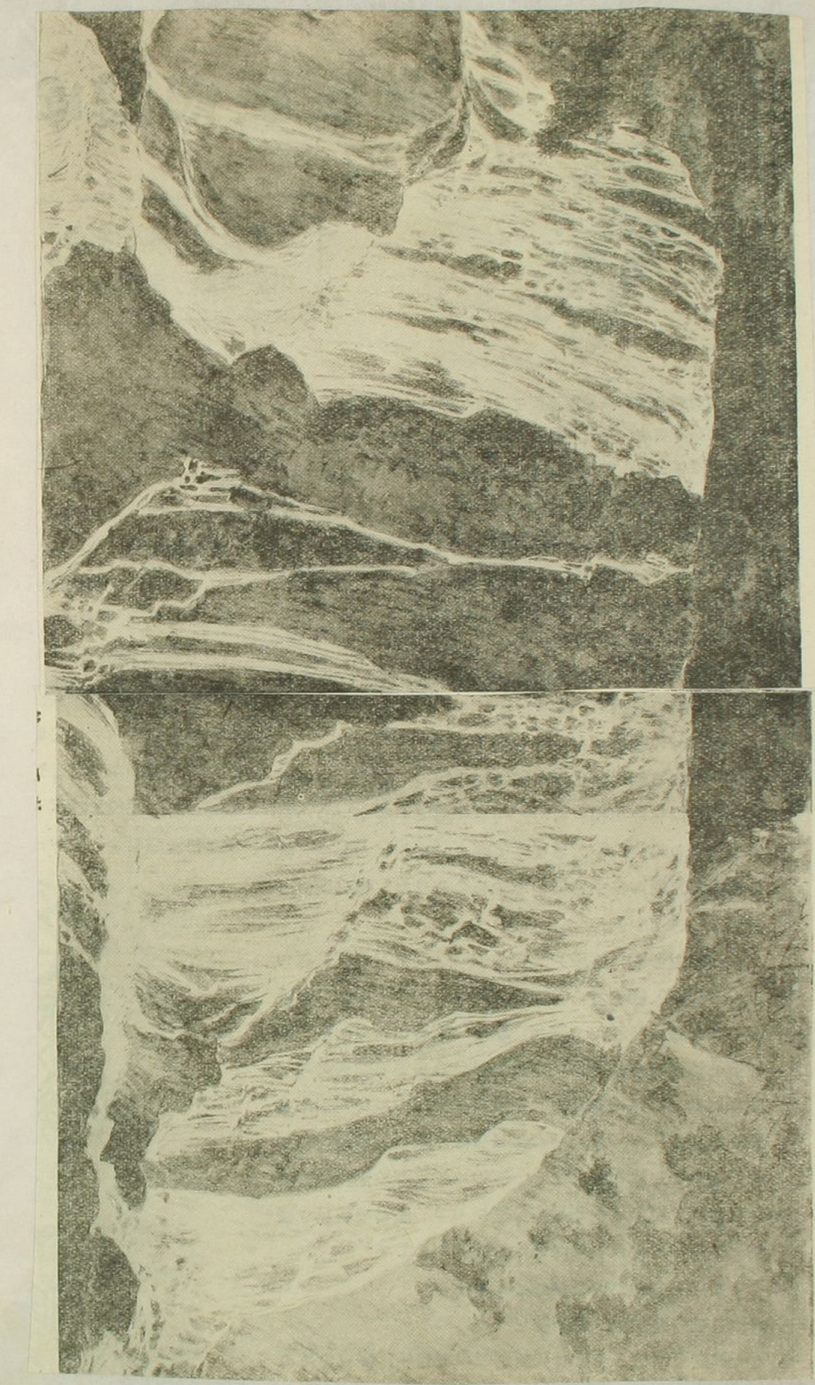
昭和十二年四月下院起筆

特別
イ4
1919
485

176750

丁亥雜記

○北海五来素川の絶筆「動乱の静観」を読み古火鉢と云ふ篇に興味を感じた。実は自分も待合の長火鉢と云ふを書いて見たことがある。素川は表を観察し自分は裏を見たのである。素川のこゝろ、古火鉢は家庭の温味の源泉であつて、夫婦が膝を突き合ひて歴史の間を対坐するのは、古火鉢あつてのことである。どの家にも古火鉢の左右に夫婦(主人)の定席があり、他人の侵すを許さゞる所である。大概台所にこの茶の間は置くれもあつて、紙瓶の姿は湯かたぎり銅壺もゴロ〳〵沸いて居り、不時の客があつても酒菜を新調するよりも都合がよく、主婦が居ながらにして台所を監督



38ニ 9271

まるで便利である。こんの貴族の階級のむらうえいこのて中以下の階級の獨逸とちがふべきまるで、貴族でも夫婦があれば、家具は何を差し措いてもこんが備わるべきである。のまびあるの上げ膳据え膳で主人夫婦が侍女や伽侍せんとする高級の家庭に於ては、美しい夫婦封建の為めに用ひられる。亦高級の家庭でもこんを嫌しきい愛がある。美い今頃の夫婦の家庭を往くる所に新る所に賑かに味が鉄けてあるとの高貴りび。

温泉場や旅館でも多く長火鉢が具へつてゐるが、自分いこんを焚こぶるべ。温泉場も殺伐な俗の家庭であるから、夫婦同伴の時や家族同伴の時でも、こんが

樣原製

甚だ家庭の味を副へる。食事時や夜の火鉢を憑つて自から酒の燗をやる気、あの小銅壺をやつぱりまるで興味がある、夫婦や家族と共火鉢を差し挟んで団欒するのも愉快のあるのである。然るに洋風が流れて来ると成金の調度まで変化が生じて、白い長火鉢の運命も危うくなるのは遺憾のことである。

七とい世帯を持つことは何人も先づ長火鉢を購い求める。世帯ともつことが人生の一劃期でもあるから、長火鉢はその大切な伴侶品で、どこまでも古くぶけた火鉢がある。美人家の一歴史を語るこんで幾代もつてくるがある。こんを無くする時は百年来の歴史を捨てる場合であるから、家の滅亡の時である。自分の長火鉢は今年五十数年前始

（昔つて戦場を往ひたものだが自分の家へきて浮世話一切の相談をするのだ。まるで出来合物）

めて来る世帯を持つた時古道具屋から購つたものだが、一時世界を突破した小説の所有であつたと云ふことを今も記憶してゐる。何等エロテックの関係があつた譚でないが、

（とい迫つて）鄭寧丁寧つて頑丈な素もぬるので、取り入れられて抽斗の多いの破損があるのみで主流を保存してゐる。家いも〳〵移転さん改造もさん、種々の家具調度、美しく活き変つてゐるのんこんなものは、つまり頑健であることを思ふと愛着を禁じ得ぬ。

（流連）して何が酒の野境であつたうとも、ふと紅園粉陣の間を飲むのは寧ろ凡の境地で一向奥味がない。（制）却つて長火鉢の主産を我物顔に占めて、朝夕ドテラの儘で自ら酒を飲み、なるべく人手を労せず、自分で燗をつけ、湯豆腐ハ自分で煮て下物とするのが好きで居つた。どこも同じことだが、長火鉢の傍らに棚や戸袋入らずがあつて、まんまん酒器もあり、雪駄さんワタのやうな塩辛注ハあり、手近くうまハ電話さんあつて勝手な料理も注文も出来る。或る時間になると、酒屋や肉屋が注文を受きに来たり、また注文もする。その時間を待つて来るまんまを火鉢へ拡いて、相手をする。だから客人が来ると、先ども相手をして飲むとその向合に、酒肴の肴を火鉢が表れんるうへ、必竟家庭風景であるこうして楽しう。亦家庭的の味ハあるからでもあるこう。

○郷土の画家長井雲坪逝いて四十年四月の祥忌に当り故人の為めに碑を建てんとして同人の任意寄金を拠出せんとす然るに建碑地は白山公園内なる碑の高さ九尺幅四尺、碑面の文字は長井雲坪先生之碑と定めて有り画家の意味なきい後世の為め面白からずと思惟するも敢て文字は改めずそのまゝ中村[illegible]氏の書を仰ぎ碑とする事に決せられ何分尺角の大字は自分不揃なれども、郷土と身分の拙筆を顧みる本意のことなれば、勢を辞して更らに改めて書くこととなれり。

○昨日四月分の現金合計金[illegible]円也

昭和十二年五月一日

[illegible]

を協議し、昨日の分から寄附された九名の方々を相俟て税の関係から表示する預金の形式としてあれこれを正式寄附とする筈である。席上山田[illegible]氏が昨日未亡人の言を取り[illegible]と申される。また[illegible]氏は徳島県豊浦の未亡人が孤[illegible]を保養してあるのを持参し昨日未亡人と相[illegible]訪問し、次第を未亡人の言ふ通り良人は実りあつかく、其の現後は何人も世話する人なく誠に無責任なかく言いが、直ち[illegible]先生の現後も盛んなる誠に美談まして[illegible]未亡人も今[illegible]つて生前の知人が俺へす者人の為め[illegible]旋さるこのの涙ぐまれるとの話話

であつた。現在今を（遺志）の書架（遺志）の自伝の著と千冊の洋本がギッシリつまつてゐる。洋本を一冊いてゐるとき、どれ丈も書き入れがあつた。特殊の痕跡が無頁こそくも、遺志）の遺跡として先上のような貴さを光へた。今朝の新聞紙上の記事は、文人の遺産が十数萬円に上り、文人が世人の浪費に対して此事業に投せられたハ稀有の例であり、尊い例である。

産を國劇向上會へ 財全

せん子未亡人の申出でに 理事會感激して受理

我が國文化に明治、大正、昭和三代に亘り輝々たる文勲を顕かし且つまた學園文科の大恩人たる坪内遺逍博士が故人となつて早くも三年來る五月廿二日の第三回遺逍祭を前にして又々故人の後潤が世人の話題に上つてゐる、博士の没後熱海双柿舎に静かに余生を送つてゐるせん未亡人は今回故博士の遺志に基き僅に未亡人獨りの生活費を除しその全財産九万圓を博士の創立した財團法人國劇向上會に寄附を決意し去る三十日學園演劇博物館に於て開かれた

市島春城、長谷川誠也、田中穂積、金子馬治、河竹繁俊の諸氏出席の理事會及び評議員會で正式に受諾されたが

今回の一大美擧には我が學園關係者のみならず廣く文壇關係者一同に衷心より非常に感激されてゐる

遺德に賑ふ坪内家を 羨む蘆花未亡人

市島春城翁は語る

この美擧につき市島春城翁を訪れると同翁は感激のうちに次の如く語られた

文人は會社などに關係してゐるのと違つてその收入は殆んど著述に依るのみで甚だ恵まれない境遇にあるのが普通である、だからいくらでも金を出してゐた

今回 未亡人が全財産を寄附したといふ事は文人としては例を見ない事でいくら相續人がゐないとはいへ親戚も多いにも拘はらず全くの赤裸でつて、我々友人と

寫眞は双柿舎のせん子未亡人

して感激に堪えない、故人の美しい心持は元よりであるが、門下生達も先生の事とあれば何事にも

財産 などは殆んど無くて唯藏書などがあるだけである、坪内君の今回の例は空前の事であつて同君は口外はしなかつたが長い間蓄れた金を溜山出して人の世話をして居られた、悪意でも無い文人でも其の死後困つてゐる場合にはい

備身を捧ます一生懸命になるといふ事も珍しい事である先日理事會の席上徳富蘆花の未亡人が病氣保養の爲熱海に行かれ坪内未亡人を訪ねられて言はれたのには「良人（蘆花）は嫌り者であつたので亡くなつて仕舞ふと殆んど構ひ手が

無い ので全く寂寞を極めてゐるが之に反して貴女の御主人は門下生の方が生きてゐる時と少しも變らずにやつて居られるのを傍らで見てゐて誠に羨しい」と言はれたといふ事で未亡人は皆々の熱心なる斡旋を今更の如く思ひ此の間わざ〳〵山田清作君を通じて謝意を表して來られたといふ事であつた【寫眞は双柿舎のせん子未亡人】

に上つた、博士は生前既に子供はなし、坪内家は國家と挙めて、遺産の全部を寄附するといつてゐたので、この遺志に從つてセン未亡人は直に寄附を申出たが、相續手續のことなどがあつて、遂に今日まで延引、三十日早大演劇博物館に開かれた市島春城、金子馬治、河竹繁俊、田中穂積氏等出席の理事會及び評議員會で正式に受諾されたわけである

向上會 基本金として贈られた額は九萬圓、遺産の殆ど全部で、未亡人のもとにはたゞ余生を送る僅の財産が殘されてゐるのみ、而も向上會と未亡人の間に交はされた契約書には、未亡人が生活不如意のやうな場合には向上會で世話をし、反對にセン未亡人の没後多少でも財産が殘る際はこれを纏て向上會に寄附、そのために身の廻りの雑用、文机等に至るまで日常の器具を細かに目録に認めてあるといふほどで、さすがに偉大なる文豪の伴侶であつただけに行き届いた心遣ひには故人の秘書役を永年勤めてゐた山田清作氏の如き涙して感激

向上會の幹部諸も新しき基本金によつて眞に意義ある演劇事業を計畫しようと意氣込んでゐる

寸前に倒れ相當の額

基本金に

方殿

であつた。[illegible]を[illegible]の自伝の著
と手許の洋本がギッシリつまつてゐた。洋本を[illegible]
[illegible]、どれも書き入れがあつて、特殊の痕跡が無頁
こそくも、遺[illegible]の遺跡とも[illegible]此上のうへ貴さを光
へた。今朝の[illegible]朝日の記事[illegible]
産が十数萬円[illegible]、夫人の遺
セラ[illegible]ハ稀有の例である。[illegible]り難いい例である。

標原製

床し逍遙翁未亡人
全財産を投出す
故博士創立の國劇向上會へ
綠濃き双柿舎の春

邸内逍遙博士が故人となつて早くも三年、五月廿二日の博士誕生の日には第三回目の逍遙祭が行はれようとしてゐるが、鵠沼双柿舎に靜かに余生を送つてゐるセン未亡人は、その記念日を前にして、全財産九萬圓を博士の創立した財團法人國劇向上會の基本金として寄附を決意し、そのため三十日向上會理事會並に評議員會が開かれて一

あると、出來るだけ自ら節約をするとともに、シェークスピア全集の完成に全力を擲げて、寸前に倒れたものゝ、その印稿は相當の額

の手續を終つた、之は故博士の遺志に基いたものとはいへ僅に未亡人獨りの生活費を殘したのみで、財産の總てを演劇事業に投じたことは、廣く文學、演劇、教育各方面にわたり邸内博士が遺した金字塔に一段の輝きを増すものとして、關係者一同非常に感激してゐる【寫眞はセン未亡人】

☆ ☆

に上つた、博士は生前既に手供はなし、邸内家は廢家と決めて、遺産の全部を寄附するといつてゐたので、この遺志に從つてセン未亡人は直に寄附を申出たが、相續手續のことなどがあつて、遂に今日まで延引、三十日早大演劇博物館に開かれた市島春城、長谷川誠也、田中穂積、金子馬治、河竹繁俊氏等出席の理事會及び評議員會で正式に受諾されたわけである

向上會 基本金として贈られた額は九萬圓、遺産の殆ど全部で、未亡人のもとにはたゞ余生を送る僅の財産が殘されてゐるのみ、而も向上會と未亡人の間に交はされた契約書には、未亡人が生活不如意のやうな場合には向上會で世話をし、反對にセン未亡人の歿後多少でも財産が殘る時はこれを纏て向上會に寄附、そのために身の廻りの雜費、文机等に至るまで日常の器具を細かに目錄に認めてあるといふほどで、さすがに偉大なる文豪の伴侶であつただけに行き届いた心遣ひには故人の秘書役を永年勤めてゐた山田清作

氏の如き涙して感激

向上會の幹部達も新しき基本金によつて眞に意義ある演劇事業を計畫しようと意氣込んでゐる

その際 自分の持つてゐた現金二萬圓を同會基本金に寄附した上、清心庵の書籍一切、鵠沼の双柿舎、牛込赤城下町の邸、財産の全部を向上會に渡してしまつたのであつた。その後博士は向上會の仕事ではなるべく他人に迷惑をかけたくないとの考へから、少くとも十萬圓位の基金が必要で

京 日

逍遙日記遺稿『[illegible]』 逍遙遺品目録

○山陽の書幅を齎らし来り書室を飾る。友人あり、荒かきしるすところ、真跡なり。而して烟霞癖の人なり。詩集を貸し、江戸より帰りし吹の心とすべし、と。

右四篇清水紀伊守伝式部烟霞癖徳川家光、右新東川市人一船江

○例の糊糊研究の大家一名侍士東洋子、蓮を愛し長時談論を交わし、侍士ら皆所を去る思記す

ハチスは「蜂」と「スダマ」との語の合成したるもの、蓮の果実が、蜂巣状なる特殊の形を由来したるものなるべし。おもの祖ヘロドタスは及び植物学の祖テオフラストスはハスをギリシヤ語の「Kuamados」なりとし、蜂巣の意味「蓮」をあらはすものとみて、蓮を一名「蜂の根源」が偶然なる事を認めたるなり。

日本の蓮の品種の品評会集まりたるものなるべし。四の池で分池面がひろく狭いけれども、実地を調べたるところ、十種あり、ハスの多分もとは世話住ちくれのひあるべし。京都の巨椋池に不忍の十倍も大きいが、そこハのが深すぎて僅かに四五種あるべきなり。

大都会の中心に不忍池と大きな池のあることは世界に無いなり。蓮花の蓮（花の蓮）行りもいのい愉快なり。市の蓮は保護を要する。

昔から茶湯を作った人は多くあるが、楽家の茶湯では六十四種、寿山国茶湯では二十六種、本多国茶湯では七十八種の図がある

不忍池の品種は左の如くである

緑紅白茶（大形三〇セメ）以上白色

水鏡茶（小形二〇セメ）

赤紅色で

赤紅茶、雪上茶、

有條のものは

金光茶、

朝白茶、蜀紅茶（無條のものは）

忍紅茶、浄台茶、

斑色のものは不忍斑茶、

大変博士が湯桶のフランス産で五百年寿の茶の

標原製

実を得たことは前述した通り、日本では不忍の池で百四十年寿の実を得たと云う外の研究の報告書を終ります。

自分は何故に斯迄に沒頭する茶実が有るかと云ふ茶茶

せず、実のまゝに長く存在するやと問ふたる郷土茶茶

の或る高貴の淑女を要する。果し泥中に沒し居る

ものの色彩の淑女を得ないが為の其使存して居るのもあ

り、フランテンのごとき若干和のあった家が今は畑

の地となる為めに、永久の寿があるのだと云ふ

ものもある。

○茶の雲竜会が白山公園に雲竜の碑を建てんとして自分に揮毫を求めきたることは前に述べた通り

井美家正門

観音堂

観音堂前の村道

學園評壇

鐵の鍛錬に倣へ

市島春城

吾等は昨今頻りに鐵鐵筋の麥を聽く。鐵價が日一日騰貴して鐵筋の建築工事は中止するの止むなきに到り、政府も鐵の儉約をつとめるに至つた。これは畢竟車備擴張の世界的趨勢に因るもので日常の淑柄も自然鐵の問題に纏れ勝ちで鐵には全然門外漢である自分も或る席で右の如き說をなした。

×

冶金界には鍛錬が最も大切で鍛錬の結果は一片の粗鐵も黃金に齊しい價を有つに至る、或專門家に聞くに原價五圓の銑鐵を或程度鍛錬するとそれが十五圓の釘となり更に一層の鍛錬を經ると三千圓の針となり尙更に高度の鍛錬を經ると鋼(ハガネ)となる、これが黃金に比すると一段價の高貴のものであるから鍛錬が如何に冶金に大切であるか容易に理解さるゝであらう。

日本刀は日本獨特のもので如何に科學が進んでも分析作用で之れを透ることが不可能とされてゐる位に鍛錬は力十Xで超科學のものであるからだ。このXは何であるか、一種の神秘のものである、全體に大切なものは及金で斬れ味の利鈍に繫つてこれにあるが原料は何かといふと玉鋼といふ鐵でこれを幾十回も鍛へた結果が及金といふのである。斯くいふと簡單な工程らしく聞こえるが實に頗る複雜の工程で原料を幾回も碎いたり折つたり重ねたり割つたりして火に投じたり水に浸したりして、十回二十回或はそれ以上鍛錬の工程を累ねて初めて及金となるので、其の勞工は眞に涙ぐましいものである。

此の工藝には古來嚴厳な作法があつて工場には一切の不淨を避け工匠は齋戒沐浴して精神の統一を圖り一心不亂で無ければならぬとされてゐる。此の工場は神聖なる靈場で宛ら精神の修養場と一般、工匠の精神が透徹せねば成功されぬとされてゐる。いひ換へれば工匠の精神が鐵に乘り移らねば鐵を變化し得ないとされ、頑々の秘傳はあるにしても最も大切な條件はこれであつて、精神の乘り移らない刀は死刀である。この意味に於て刀は唯かに活物である。工匠が終始敬慶の態度を守るのも此故で、佛師の佛像に一刀三禮の禮を執るのと同樣である。日本刀には日本の魂が籠つてゐるこの點斷じて他國の追隨を許さない。

×

私は不束ながら冶金家や刀匠の口眞似をしたが實はこれを人事に應めて見たいと思けのである活物にあらざる鐵ですら鍛錬を經ればこの活物に五いものとなる。

活物である人間は何故に鍛錬を忽かにするのだらうか。人間の能力の發揮は鍛錬に因るものであることは特に喋說を要しない。同じ教育を受けても大器となるものがあり鈍物の嘲りを受けウダツのあがらないものあるのは鍛錬を經ると經ざるとに因るものが多い。

世の譬に苦勞は人を玉成するといふが、多くの成功者は皆苦勞人である。苦勞といふは即ち鍛錬であつて、その苦勞の大なるものほど火に投じ水に潜るの焉だしいものもあるが名刀を得るに幾回か及金を水火に殺じねばならぬと一般で、學業が如何に優秀でも苦勞の經驗のないものは未完成の人で到底世に立つては人後に落つる不幸が生ずる。活社會は鐵場であるから鍛錬を忽視してゐる憾がある、私がへない人は其の殺伐の場に立ち切れない、まして鬪を爭ふなどが出來よう筈はない。

吾々はしば〳〵耳にすることであるが某は天才であるが惜しむらくは夭折したとか、某は富豪の子だが營養足つて才が伸びないとか、斯る訃へを聞く傍ら君等の耳を驚すのは、某宰相は嘗て役場の給仕であつたとか或は某工場の職工であつたとか、牛乳配達であつたとかいふ事實である。併し一考すれば驚ろく可きことでない。要は鍛錬を經たるものが成功し然らざるものが成功しないといふ當然の理合に基くものである。之れを思ふと學業が成つたといふて安心が出來ない。彼等の修業は半途である。學業を終れば別な道場で修業せねばならぬ。それは活社會である。活社會の樹に叩かれ水火を潜つて鍛錬を經ざればその人の利鈍はまだ定まらないのである今の教育は理智に偏して心身の鍛錬を忽視してゐる憾がある、私が鐵の鍛錬に倣へ、といふ所以である

○今度の総選挙の早大校友各派の当選者が七十二名、早大関係団体の当選者八名計八十名となる。これは衆議院議員四百二十六名の五分の一を占め前回よりも十名程の増加を見たるのである。御存の通り政党にレッソンを與へたのこと共も亦き将来ひ物なるまい。

今度の選挙の結果は既成政党に大打撃を與へ、彼等の勢力倍数を増した。新人等大衆党の侵蝕を受けし譯である。彼等は既成政党が我国の人心を失ひたるを意味するものである。彼等は寧ろ人氣を利用して勢力を得たるものである。彼等の主義主張は独逸の社会民主党に類似する。国民生活を切り離す、多数の

の選挙者が其の主張を支持したのは不思議はない。既成政党は多数を占めたるのみならず、其の政策は逐次採択されつゝある。民政二党の主義主張は既に陳腐の感がなくもない。彼等は其地盤を切り崩すより相手の数を減ずるのは情勢上有利である。陳腐の主張を捨て、社会主義を徹底的に実生活に応用する主張をなすべきである。

○昨の衆議院に政党の出張所たる。川崎竹春の信仰者は数十人の目を驚かした。

落選を掩ふため恐らく接戦といふ思いんをしてあらう。

赤松氏は新聞を傍らに居るとの思くらるる。

(一)赤繪六角大花瓶

○京都物産主宰の雅俗「卿士関東」の文の稿者が墨堤の言問ゝ合しれのゝ都ゝ自ゝ出ゝ花園を訪ふれが、庭園ゝ森のかくびあるが、世居ゝ仏像のあるを見ることゝ、庭もあしく狭きゝ、宿ゝ人もすくく寂寞然たるに、陶家の入り金ゝ自分が史の俗ゝ名を忘れ故詩人大久保湖南と共に逸(遠)策錦の三ゝを撰人ゝことがある。風流深き(の)音で、自分も其の湖畔の縁園があるが、外部から見ること今のごとく大きゝあるようでもある。女将の既と鬼籍ゝ入れ筆び室ゝく思れが、懐旧の情ゝ堪へざるものがある。

今日の今場の言問団子屋の様子も、昔ゝ比べれば、階上の初めて、四五十人を六畳

室があり、ここに国分尼寺の西洋料理を喫するもの、
あのことゆえ、こんも時勢の反映かと一笑した。北の今宮通り
十五六町を南部坂味噌屋と名称する人家あった。
北斗七星の始めは島崎藤村（文太）氏の生家で、通称「門下」がこれである。久方振りで今宮
三宅和軒と云う料理屋があれ、老舗家の井田秀四郎
氏の篤志（今宮も二三の処が旅館の次
第で淡雪豆腐を主菜とする。自我（北海道の
懐石料理が沸いた。市内に八百膳・追徳旅館をやっ
ぱり次第に行き渡ったから変ったのだ。
○禅僧が時を押量する語に「日々是好日」と云ふ。
これは厭世主義と説いて「日々是好日」と云ふ。人間は我儘なもの、殊に自

分は愉快の事でもなければ不快の日とも思はない。唐人の日、俗金取
りの来る日、宿酔の日でも日々は忘れ難
しきは昔を偲ぶ日とあるとて、どんな好日でもいとして排
斥する。考へると実に切体なことだ。人生僅かに五十
年若くは七十年、光陰の矢の如くに（茶）憑まるる
去ることは光陰を惜むことを忘れず、日々ケチをつけ出すべ
き日の日々）こそなるべし。（異利を貪り、ケチをつけ出すべ
別して老境を迎ふるこの前金（義理）もないと云ふ様にならう。
不愉快な事ばかりでもあるまい。どんな日でも好日として
愛しもしよう。不愉快の事ばかりあるとて、好日を引立さ
ばかりである。実は心掛次第でどんな日でも好日となる。毎日
多少の善をなせば、心が弛緩する。その日の好日である。多

の者役を服した事が感。とこう愉快の心地が生まれ、旁役を服する日を毎日とすることの誤つてゐる。後書をも與を完くんば、まんべけひもかのである。何か（責任）を責（異）しを其日は好のひあるる。酒を飲む愉快を感じも其日は好のひある。記族故意が若ひ美へ（の）と良ひと久間を叙して佳味を感する其日も好のである。日々を好日とすることせざることを其人の心掛に由り、祝儀の此の法は人をして日々を好化せしめんとするのであることを思ふと、確に貴い教訓である。

○アルウサングのスケッチ、ブックの表の一篇を婦人画の力を左の如く叙してゐる

萬の永い間の美しい業を大樹の樹に巻きらけく、よく日にあてもらふと、この頑丈な巨木が花咲

のかくれん坊遊びかんる時ふと幹のやさしい蔭をかくまもせ、新しい枝を縛り支へうものがある。美と同じやうに、いみじき神の攝理によるも、女性は男が浮彫の日々は、單に之れ依賴する裝飾のすぎないとの考へ、彼が完全の奴隷（に過）ぎず打ちのあさんうと、彼の支柱とする慰安とする（ものを）やらんも空めらんもある。づかん手を伸しも、男の花をみけもれ心の陽をといけすやさしくも彼のうなれんがちの者を支へくのんは勇氣を取戻させやうとするものである。

○仙後弥彦神社を近刊弥彦神社叢書を高セ系ら本書収める所

一 伊彦比古神社記　元禄元　為西尾之喜兵衛

一 續縁起

一 伊予国伊夜比古神廟記　羅山林道春撰

一 伊夜比古縁起　文書　天保九年

一 續縁起一言集　三冊　光親卿記　明治二年　筆写刊

一 伊夜日子宮鶴傳

一 弥彦神系考　鈴木重胤

現宮司高橋家大日記　仏頁二の三

○故某中比頃音歎ぶ没し後世家の主人の自叙伝を得て出し頃大名生活を大名自分から穢くも一無と嫌い得し伝ふ事の出来ず後世家に仕へ行の際功績の多くべき事多かりしかども動と雖も人が

平凡の大名にすぎざりしことと知られ候。後世家の支配家に生れ、後世家の主人が若かりし頃、侯の父が自本家を継ぎ、体躯を長動が本家の主となりても、維新の際脱藩して勤王家に仕へ、身分が卒族に落ちて一事も知られざりし深三石の家禄なりしが、三石は後世家の家老にして分家なりしことも知られたれども、北人が未勤の旁祖父び、母が三石の孫娘なりしことを始めて知られ、自叙伝には三石を記して左の如くこれあり

余は幼少の頃より祖母に養育せられたれば、又深三石とは祖母が話せし、これを敬慕さを受けたることが多かりしなり。深三石は後世と称し、余の実祖父にあるが、漢書を修めび、書画に優れ、大石良雄と共に、徳川幕

府を通じての三大夫と称されたるの人物にして、廣崎藩政の改革をなしたるの実に此人にあるなり。

とうたるなり。えうも亡て思ひ出すに、当りて三石の自から集めし二巻の墨しれる名家手束を獲たることがある。巻頭の三石の筆字があるにせよ、此等の言流なるも論ひもつたに。えうを木下順庵を巻頭に有名なる名の千に間十数名を数のもあるにせよ、新家なるもの一名にすぎざるのみ、三石の見識も家はんにせが、実に三石が浅野本家を二代まで続いたに、其本ひあることを始めもつたのである。三石の孫娘君（乃ち長勉の妻）が碁基を以て（此人が忠烈とうふ長勉の実父ひ）維新ののち此人が浅野家の主ひもつたに。

此自叙伝に大名生活の大概をもつたが、大名生活を美味なる

樣原製

もつたに実のうるさ〳〵苦いものであることを去勉の語る所つて今浮世に維新の際小藩御所会議が不平亡命の今議で其間土藩の抗争論議を浅野が苦心したこと、雄高を家老にしたこと、今治藩果て焼豆腐をひ物く粗末の茶菓子に酒を飲みかつたに。其の茶碗が紀念品とうて浅野家に大切にされたもあるもうる。流石自叙伝なるもあるもうる。

○乃木将軍はあのやうな謹厚の人ひもつたが、四時の頃豪でもつたのむ、特に軍が丸亀の師団にあた時、桂山将軍が文相にうて四国まわいたに時、主客うて乃木は将校がテーブルを向つてあるも桂山を迎へたに。桂山は将校が多数起立してあるも乃そんとも向ひ合つたに、乃木が辛

木が弾合をのせてビールをつぎ、更に弾合を乾して飲めと言ふと兵卒は一齊に各府校にビールをつぎ、更に弾合を乾して飲めと言ふと特徴は一氣に飲みほす。そんなにたくさん(たくさん)すると中の一人は弱いやうな弱武者もあつた。樺山乃木は流石に立派に飲んだと、此時の光景を樺山の秘書官が回顧録に乃木は獨逸(ドイツ)ビール決闘の経験があつて、光を平然として尽くす。平常の生活ぶりは質素である。

○貞会の旅行西木立彦の造詣を好んで漢詩を作つてゐる。西木は長く美術学校長を務めて多く美術家を知つてゐるので、美術上の記事や美術家の経歴が数多く、今迄に美術家を数へることがある。此頃出版された

樣原製

れた画廊七十年の中に二三の美術家のことが出てゐる。清水竜瑞、白山松哉、横谷清山などは自分の初めて出会つた美術学校の金工科卒業だが、内裏雛と清水野勝哉が浅草の名家で、此人は此頃の名家で、此人は名刹の遠藤吉兵衛と共に、其画廊が聖徳太子の彫像と横谷を作つたのは、前の横谷は、こゝに清隆寺の宮殿の彫刻を作つた。横谷は、親鸞上人の信念から一層美術的に進んだ人であつた。白山松哉は美術学校の漆工科の教授で、日展大正時代に校の漆工の教授となつた。許さんは人物が此の人の特徴の技術は漆を塗り巧みに漆を描くことが出来たこれは古来の雅とする

たることあるが如き、運筆自在であつたことは、勿論北人の業の業八或る特殊の毛を用ひたことは、ことに、ある為めに鳥の羽根の硬き、出しもやの如き、こんの鳥の毛が、おう軟の柔かな味のひを持つて生かしたまであるが如き、の如と共に、其の技術は、偶のかまつたことは。板谷波山の美術の発揮は、木彫、木彫、木彫を出発点としたが、いつしか陶器を作ることを、専業とし、終の為に成功した。陶器であるから、自用の器を作つて、其の作品を飾き、家具まで、彫刻、陶器、造り成功した。其の業績を遂げ、成功した。其の業績を、くも、漆、蒔絵、ぐまでしいことである。龍村平蔵の、仏壇の、飾り、足、敬時、ことである。正木の、ことは、ことは、絵、七、深料も、現代の、ことは、仏壇、古、不、遠、あり、こん等を、器、元、七

横原製

業績のことを、得ることは、支部を、求めることは、出来ない。其の、さることは、ことは、深、料、也、しく、業のことを、変化を、生ずることは、支化、的、変化を、生ずることを、技、が、こんの、実、業、り、支部、実、化の、ことが、存、ことは、こんを、在、用、ことは、ことは、ことは

の蓙素を敷き、退屈の方が寧ろましだとある。事を俗
めの術数に教来する、渇えんが術数に酒を飲む、優婆自
高などと云ふのは自分の境界なれば、自分の日々は禅僧
の所謂好日であらう。初めて苦があり初めて
無苦を知り、悪日があるも初めて好日と感ずる譬ひから、
自分の今の境界のやうに、何人の苦もなく何人の不幸も無
いとすると、日常が平々凡々の境地こそ、別り
難い境地だ、そんな別り得んが禅の説らう所こそ達
しんと云い得るのであらうて。自分は自ら強くも勉もる
ばかりの所謂の日々好日の境地を指すと云へるいとと
がるいと感ずと、自分の幸のものと感ずるを得るのである。

○早大の試験時期迫ると、続々親族や知人の子弟
の入学を依頼らいさんる。自分は学校を卒業した身分
だから、自分に頼んでも、教授さんやうがないのだが、矢張り
ヤッテ来る。それの皆不出来の子弟であるから、受験の
依頼の大抵入学が出来ない。自分は大切な関係のある
子弟だと不成果を終るのに、毎年のことで、断りたくても
来る子弟がどんどん入学する。自分はよろしくない子弟を
命者患者のやうなものだ、手をおいろい金庫だから、なよ
つてくるのである、そうすると、自分は名医のやうなもの。
四年の治療を施すのだ、四年が経すのだ
ると、死ぬものの病院ばかりの病院ばかりを
死ぬのも不思議いまい。自分はいつも入学志願者の

八幡湯の出来た時に自分の四手だと感ずる。

○隈川会で正木直彦を時々えらみて、最初は正木
は必ず大隈侯とどんな関係があるかと思ふた。今度正木の回顧
七十年を読んでみると、正木は徳川幕府の一代々木
ことが分つた。正木の祖父は出身は日本の大書記官をした吉
田豊文と言ふ人で正木を第一度の子孫。北条四の家へ
千葉子と言ふ人で長の妹相良物子の息女で長の養
めとりて吉田家を嗣いだ人で、紅毛聴の婦人であつた
と言ふんだ。なんで関係が化学者で有名であつた吉田彦六郎
と鶴松の関係があり、彦六郎が化学後本を作る時
正木は二十日に伊豆の温泉へ三度つて正木が文章を綴
つたと言ふ。北の吉田彦六郎の長男

原製

東京帝国大学理科と法科とのどの系統を引く人で
分も心安かつたが、北人は吉田彦文の末裔であることは今度
始めて知つた。吉田夫人のまく淡しいので正木の家系すべき
人を選んだのだ。正木は吉田を経て伝で、故侯大隈侯
の世話をしたのだ。北人は隈の分を養かしたのも偶然で
ないと思ふた。

○三代目「四代目」を妻とする。えんの楽天的の話である。善
を好む人間の一日一善をもつてゐる。トルストイ
とが一日一善を書いたのも毎日を祭るようにいかんである
だらう。毎日善をなすことは吉実出来ない。古人は日
々善を為す為を知らずしてくらす
天寿を全うする法を知らずしてくらす
トルストイの説く人間の人人間を

みさご

第六號

銅人

春城生

人間の相貌を寫して銅像を作ることは、西洋に倣つたものであるが、東洋に銅像が無いのではない。佛像も多くは銅製であるから無論銅像で、東洋諸國にはどこにでもある。我邦の南都の大佛などは、佛典にこそあれほどの大きさのものが記されてあると云ふが、實物の存在は日本のみで、實に絶大のブロンヅである。併し人間の銅像も古るく支那に作られてゐる。それは人體の裸身像で、銅人と名づけられてゐるが、これは故人を記念する爲めに作るのでなく、目的は全く異つて、醫學上人體の研究を目的としたものである。去れば此の銅像は内部の經絡まで具足したもので、神經や血管や脈理などの複雜微妙のものが如實に作られてゐるから、今の銅像よりも藝術的に靈妙のものと云へる。此銅人は醫學堂に置かれて、醫術の試驗には缺き難いものであつた。支那では昔し醫術の中樞は針灸であつたので、針や灸を施す所が、幾十百個所チヤンと定まつてゐて、それを誤ることを許さなかつた。此銅人にはその急所〳〵に微細の孔があつて、試驗問題が出ると、其問題に應ずる孔へ誤たず針を差し入れねば及第が出來なかつたので、最も大切なものとされたのも無理は無い。銅人の經絡は貫通してゐる證據には、其の一端に水を注ぐと、全經を經過して他の一端から水が放出されたと云はれ、如何にも微妙の構造であるから、支那にも此銅人は多く存在しなかつたと見え、漢の時代であつたか、此像を作る必要が起つた時偶々外國の捕虜の中に工藝に長ずるものがあつたので、天子は召して銅人を示し、お前はこれを製作し得るかと云ふた。工人も初めて見るものだから、答に躊躇したが、原型があれば模造は出來ると答へたと文獻に見へてゐるが、唐工の能くし難いものであつたに相違ない、日本にもこれが渡つて來たことがあるが、惜しい哉明暦の大火に燒失した。今は其の實物を見ることが出來ないから、聊か其の大要を記しておく。

江戸に長い交のある。彼の早大出身で早大関係の事業と関係し、早大出身者で創立社等多の関係した事業と長く多くの深い関係がある。毛利の人びとと事を共にし、満州に渡り、そのつくづく世界を幸福にと祈ってやまぬ。温厚であくまでかしら人を重んじ、ひとりでも人を国家の出である。

なお、出国出身者大と三宿出身者亀井の長男を娶り、全生涯を三宿出身者と寄せた。百科辞典の編纂、中行悦を生涯を通じ、貴人の格式茶道馬場鉄一とは一層の力を幕末にあるる。三宿出身者の誇りを誇りとする人であったのは今に生し

五月十四日記

○徳本侯に於ても毛利公所蔵能衣裳の陳列をなす。其目左

樣原蔵

一 裕 異 狩衣
一 裕 半 狩衣
一 裕 半 法衣
一 裕 長 切
一 裕 長 切
一 縫 服
一 縫 服
一 縫 絹
一 縫 絹
一 縫 箔
一 縫 箔
一 縫 箔
一 縫 箔
一 縫 箔
一 厚 板
一 唐 織
一 唐 織
一 唐 織
一 唐 織
一 唐 織
一 唐 織

以上

錦紗 蝦夷錦 唐織 錦 錦 崩黄地紗 紅地緞子 紅黄段緞子 紅地織 黒地平絹 浅黄地緞子 黄地緞子 紅地段 紅地に雪輪重 紫段 紅地に檜垣 崩黄段
紫地に菊紅 崩黄地に亀甲つなぎ 赤茶地牡丹丸に雲龍 紫地亀甲獅子丸 紺地に扇面椿 扇面に唐草文様 笹立涌に牡丹文様 秋草花舟花包文様 丸紋散し文様 貝つくし文様 片身替に銀杏文様 草紙に秋草文様 雲に秋草文様 間道縞格子 扇面に唐花文様 水仙文様 百合のうせん花包文様 四季花包文様 つなぎ菱に鳳凰文様 唐花に扇面文様

壹領 壹領

御秘蔵 公爵毛利家

能衣裳展観目録

のみし、徳川期工芸の豪華なる、恐らく能楽来らん、絢爛目を眩ずるもの、浮華なるも、自から品位を保つ所の美術美を認む、余の尤も喜ぶ所のものなり、其の色彩の高味のあること、其の色彩美、尤も学ぶべし、

○夫の能楽の仕組美術の完本を持ち来り、手ゝ所試を能演ず、如くなんとする、事は能楽、舞踊、霊、を浮き彫り、未決望、在りて無形を極め、国民の為める所の能楽美術を語る、国民皆美人、聴きたり、書物を奨世界、時代、当時北条の世を問わず、時代全巻略、記録、岳、北の思い出を録したかへす。迷惑、若き特のみし

○子淵や品子の歌れ、やはり肌のあつき血汐に溺れ

五月十四日記

横原製

世で沐しからず、や道を説く人、と云るのは教育の真諦を解、和歌、ひとり、春畫の西洋、販売を禁ずべき牧師を除外、道を説く人、なるを要するが故の為。

○永田氏曰、米人、日本を説く、比較中、日本は特殊の国り、嘉化特、が併し深みがあるとみるが、誠に国民性、なる、性、能行機、汽車、一トとなり、日本を観察、日本を認、得ることの為、あらんとの皮相の観、あり。日本の三百年の歴史をみし、各代の文化は堆積し、今日の日本、未だ外人が自国日本の文化のあるを驚くべき、どの程度、言葉の誤りを免かれず、日本の文化、尾ひれ、ある洋人がある。西洋共通の文化の如き日本、於て唯だ文

化の一端を窺きず、日本の真の文化を理解せんと欲せば、
数千年の研鑽を経さる可らず、国土が狭いだけ
美文文化の根柢が深く、奈良に渉猟し得ざるものあ
ることを思いさる可らず。

○梅氏談曰、八詩人の如き詩人とならんとするが、餘り感心する
ほどの詩が無い。流石に山陽の絵画は詩に劣ちる。

言情我衣坐談吐、戰氣撲面愛松眉、冊中
終有乾坤在、滿腹肝腸赤陸離

○記かりソダバッテシマイと此れに二葉亭四迷と名を
命した人もあるが、本名を言通ぶペンネームなれば
言滅雲亭、河東碧梧桐がある。碧子は洒の言通ぶ
あくまの裏振、桐は多分余輩の言通ぶであらう。

橋原製

○ある人議会の解散を強いて云へば
人らあるから、さあ議会の坐を出なくとも
誠に クウデタアである

と云ふに昨夜

○多賀の如く雨である。多賀の日本晴が風景と雨とのの例
題である。画き南北ある雨の有無を因ることも云れ得よう。北
畫の峨々たる山はあんど絶へて湿潤の気がうん、南畫は雨の畫
であるが、雲烟のあるが其の特徴で、畫面は湿潤の気が満ちて
居る。

○國技館(十三日閉ぢ)は閉ぢ、双葉山全勝霸を唱へ、自分は横ケ
谷り全盛時代を懐しもの感ありを得ない。横は大関を
ちつて以来横綱となりてより十年間一回も敗れたことなく、横綱を

うこの時敗けたのうらみがあると人をして思はしめた。横綱の権威のあらはれである。明治十七年芝離宮で天覧相撲があつた。板垣の大関の天竜と立合つたが勝負がつかず引分となつた。其年の四月横綱吉塚が板垣大関を敗ぶつた。板垣は立ち合ひ角界を良くした。板垣は横綱になつて以来日本開山天下無敵を以て行はれるのを敗ぶつたのは中澤が初めてである。彼は人品一代角界の道義を守つたのみならず政治家としても立派な働きをした。横綱と云ふ名称は実に中澤が生んだものである。大関の出石は実に今の横綱に優る三十数名出たが、横綱に優る三十四人を過ぎない。今の横綱は強い星を持つて居るが、其の苦しみとも云つて、今の番付の東西の横綱を相手にせねばならぬ人から、黒星も生ずる譯

で一撥と共の技が下へ向つて迫り来る。若し之を敵へると体量の下つてゐるものが今の力士は勝つのみと角力をとる。技と角力とを兼ねた大錦は実に男の大丈夫出身で、体格は偉大であつたが力が共劣つてゐた。其の短を補ふ為めに技を使つた。戦法は力以外の技で行つた。こんから北海が行はれてゐるが北海の力士は若い早稲田の出身であつて、今の出て、ゐる笠置山と共に早稲田が角界と縁故のあることを考へさせる。角能の前途は実に技術的に進み其の結果は無限の命とかはつてゐると豫想せらる。

五月二十日

○東京人形館で三宅雪嶺の春秋と題する人形を

いと。文界の人、四方数十名今宴に盛会なりしが、雪嶺の令子、あるひは祝賀の会を長崎に、鞍馬の相模屋と折り柴の起人が数多く出来たが、雪嶺と陸羯と盛承流さてさ見しを左せされば鉄唐亀利をやうと云ふ決意まむしと鞍馬の八言ての比、雪嶺の人々く過ぎるが無色もらくるく元気でもあるが、彼れの例の詩弁の雅弁を捉へて御都を陸べれば例の如く皮肉を述べるべきあつた。曰く、医者の盛御うるるの身体を実行するとかから控へる曰く、妻寿の就てのが賀の家老が市河迷庵を比の家の相撲を鬼の如く来庵の気のうをなるべとうあて座でうつた。曰く耳嘲うるんが人の言を聞ハ彼れから真合も折角の御呼者の座でした。曰く、設を方のにんの出つるのにんの出つるのにんの出つるの

く。雪嶺は文化面豪と言へども此分を内心光栄とす
しかれどもこれ自分の田舎ひがるから程々の思ひ出もある
が其内書いてこそこそと思ふ。
○三宅雪嶺の平等の同宗で支那哲学と称める雪嶺は抵
抗と趣味があつた。山田一郎も同宗で人生新文記者の心
抑があつたが山田は記者を辞めると政治家になんとし
たのが失敗であつたか雪山領は記者として終始してゐる。
山田は早く銀行の方を雪嶺が書いたが山田
は天才の出来損ないとこれが公平つてゐる。雪嶺は
安政元無性こそあれ表明らで汚職を極め新聞ミカサ
があつても決して安寧を奥氣のある男ひあつ
たが、あの人の意の嵐を術は洋書をかくて巧みあ

つた。鉛筆画と絵さへ時々見たが時々
も優れたこともあつた。徐画をかつて生と
入つたと今も思ふ。洋行の時は仏国にて高き
り西洋画と名画と見たことが絵つたらしい。雪山領は納
洋画と称る相南の鉛筆力があつたらしい。
井の為め活きを抜まず、人に会すると程々の質問を放ち自
らは考を出さらい人は想ひ出だいつもや最る四十年
前の既往を語るため自分が墨道に歩いてみると雪嶺は
解説して此れ一結を浸ぬると、雪嶺は新聞と
程々の質問的の言を出す人は笑ひ新聞
は笑をやつた。その時は思ふに。納新とふ人もあ
れ自ら言はず人に言はず自己を益すると、北の教育

を傾けて、浅茶あがりの料理屋に入る。翌朝早く三宅もあり使が来たとゝふから、寝かゝり来客を送ると、雑子であつた。小生きた鳥を買ひ入れて来た。自分は別中に籠の紐を解くと鳥は早速飛び去へれのび、自分も寝ようとすると、鳥が活動を始めたのを捕へんとして寝ようとを雪嶺に報じたことがある。又ある時書斎の掃を始めた時用後が汚んで解しきれなくて戸口迄出て、窠のへいたのは、此家が寄つて自分の住んだ家であることがあつた。その事を雪嶺に話すと、雪嶺のあきれて私の胸倉を捕へて、私の口振であつたことを真味を感じたとゝくる。私は其際此家を入れ離れた一家かある。然、そんで笑くもあると決つてあんたことがある其時の事

樣原製

嶺の花園と日掛であつた。花園は日を暮(大二)の長の時代と共に菊の交活を思いて苦つたことがあるのだ。花園は高島から蒙る場合時代に、よく面白いものの国なら来たのだ。多くつてもある。大限先侯在世の時は雪嶺と大の場合の海浜を歩人とともあつて、炭いつも踏んで雪山嶺を浜敵として、雪嶺が漫る炭の言を賛成しるのを侯い寧ろ表えた。私が雪嶺の郷里加賀の金沢を経ける中橋若樹山の麓を大敵長後撮り長らて歩く時、私の海浜に對して雪嶺が反駁文を書いて中橋の桃園紙に載せられる四節の組で二頁と海ることがあつた。武器と雪嶺と解んだのは之が始めて又終りである。

私の考へるところでは雪嶺が言利貸と関する任務のあることと、いつぞや狂法と共自白をえることとがあつて、自分らも深い関係のあることを考へて、大正の末葉後藤のために苦いうのを北の関係があるのを敢て異とするに足るものがあつたことを言ふ。雪嶺の減多な手紙などを書かるる男で自分の言を一言もいはれず、只だ黙殺の存するのみ、山田一郎の偽天下之記者の虚名の存ずるのである。

ロキ愛の『雑伝烟者』から学ぶ者を嘱するのを聞く。楽じ即時著を把り立ちて学のセル。起いの不滅の火であるが実いのオートんうしくが始て喫烟した時不滅の火と欲したとの逸話からヒントを得て北斗

標原製

を得たのである。世界の不滅の火といふことが考へられる。

その出発の嫁がれたる火山や活火の連絡と

る大寺刹をいろいろあるけれども、廣く世界を

七度に日に焼き烟を吹いて絶えず問うていると云へば

喫烟であつたことを不滅の火であるとの。烟者の

史の実に不滅の火史であるである。

喫烟の根源は七度人から起つて遠く世界を流行し、

さらに喫烟の前に跪こうとの如くに人の時の如くに

北斗のごとく、青人の考へる世界が紅陵されたやうなる

今いマツチとの前後の火がある。けれども、えりきこう

し南時を想ふと、喫烟家も火を得ると可なり雑儀に

系統的の燈石を振りく。全れ火する時代に移り古

るい時代でもあり、喫煙家の概ね煙草を腎臓病、保
健を害するものいうまでもなく、社中一般に相風潮家と就て
火を活ふこともあるが、どうしても火の使ふんきい傷害を太陽
を仰ぐ日火山の噴煙を吸んで怪幌ませうもある
此人間の喫煙嗜好は実に強烈である
人間は他の動物と異つて火食動物であるが、此文化の動物
と異なるのは煙を飲食とすることで、これが業物の重大なる
人間の特権であるのに反し、喫煙の嗜好は人間の本能的な
るこの如く、吉来嶋氏を以て之を禁酒(煙草)を試みたるどうしても
目的を達し得なかつた。そこで巻煙家は漸やく諦ら
めて、逆に喫煙を奨励することとなり、煙草の収入を国
費とすることとなつたのは、明治維新の動向であるが実に国

横原製

の特徴であつた。どこの国でも国税の重きを置くのは煙
草税である。日本も此を政府の専売とすることとなる
つて、益々収入が増加し、近年迄を高めたるが巻煙
草用は減じたるも、まだ大いに物を言はせんとする程
得のいいものだから、何者のみが大いに力を巻煙草を得
得るこの如
日本の文化は何ものかを云へば喫煙の収入が文化の起
料と云ふべきであつて、此の莫大の収入が文化を助けも
発するのである。又喫煙は煙草の産物で今を義を喫する
と云ふ所の火煙と侵害からるが、人心を未だ煙草の動
物で之を誘りて心華を苦神する目的も偶然ひとし
大い住国の大業わい詩歌の風流と動るまで喫煙で

心葉を茂らすことを得ようとするビスマークは大の喫煙家で出陣中僅かに一本残つたシガーを溺死の戦友と共に酒を酌んだ。マゼニーが亡命して龍動の客舎で潜み喫煙中に刺客が闖入し、マは驚きもせず、徐ろにシガーを出して火を点じ喫煙せよ、然る後ちゃんとする所存だと言つた沈勇さに刺客は辟易して屈したと云はんであるが、こんなことも皆煙草の味を解りその心葉の発揮である。

若しも仁慈の天子言き給ふ民家の煙の立上るを見ざるかと、民の心意も賑ひけりと表じ給ふ如く、今八吐月峯を煙の物語るを見て民衆生活の繁賑をトすることなるべし。煙草の煙のように家へ寒く沸く

樣原製

概して幸福と表はれんうの家にある。二世帯の豊家は煙突の多寡で判ずるものとすれば、民衆の栄枯は鼻孔のチムニーから吹き出す煙の多寡が判ずべきである。

○昨日の午後豊浦国を刺り教育を試みた。桜の花候は出うとはいのは前々月であるが、新緑を味はんとしてである。光陰は過ぎ去り桜花は少々寧ろ去るを惜しむ所である。国民の忘恩行為は遂に日を追うて強く根ざす動く者は光陰から与生の如く、道義一つ新のん北風を来すと一興なるべしと。今は毋国の午入時で、松の枯枝を去つもあり、池の泥を掘り上げるもあり、戎十郎様の北国の往

学生生徒多くて又学校に入る者い多からず、故に（故に）を免かれざるのは仕合せであつた。前田四位に愛を（避）けて先づ歯を小兒の為（歯を直）めたが、流れこ二度まい多数の少兒を認めた。田形の小学の乗馬場、兎行機などを見た。北上まい相当廣い野球場があり、また（また）きを行くと、山に設けた概大な神社と云ふがあり、鬼が島と名づけた小島と新築の社殿があり、池やりきい変化の満載を擬した船が浮べてあつた。池の端は鉤堀があつて人い多く綸を垂れてゐた。北上川に沿ひ任意に（任意）してゐる。また川を架した橋を渡ると相撲があつて、そこに聚楽荘と称する相撲の練習場があり、加茂の任意に（任意）

標原製

ものに、小集の宴席きいろ南の家と見受けた。また華堂を任渓堂を見たが、こんも相撲の設備で海人の目を怡ばしもるも鉄き難いものと思ふた。また乳しい出たが、また洋式の建物もあつて可なり立派なものであつた。小高い所が古城址で、流れた北上川木の風致は煉化造りの喫茶店も設けてあり、史跡碑と云ふが建つてゐたが、碑文を読まずに云つたのは遺憾であつた。なんとも国内き石神井の川が流れ、あが桂の風致をなしてゐるのは北国の名所と云ふべきである。

五月二十日記

豊島園全景

聚楽荘
新トラック
桃太郎神社
鬼ヶ島
新ボート池
釣堀
小供乗馬
遊戲場
ボート池
ウオーターシュート
新ホール食堂
大ボート池
電氣ボート
スポーツランド
飛船
自動車
動物園
藤棚
日本庭園
櫻の樹
白滝稲荷
東京保育園
慰霊塔
噴水
温室
プール
ジャワの滝
花壇
葡萄園
羊堀場
馬場
ハトラック
園整事務所
売店
所便
松山
サンマーハウス
中の島遊園
野球場
桃林
大トラック
中トラック
テニスコート
運動事務所
鯉の池
睡蓮の池
吉城の聖堂
リレー
スベリ台
野外劇場
くぬぎ茶屋
貸切日本家
事務所
正門入口
練馬
豊島園駅
櫻台
田古江
東長崎
名称町
池袋
東京
武蔵野鉄道

○森本藤太の金が毒の家和泉家に寄りて大和の義挙を企てる前であつた。毒の父直一が勤王を唱ら、秘かに此の義挙を助け、互ひに約する所のあつたのを想像と飲うである。が、当時大和と他後の距離が飲り遠く、馳せ参ずるもの多くの日子を要し、遂に間に合はうとのでい、幸ひに身を金ぶ此、人員の此の義挙も飲うに日子く敗れたのでい、えんさんへう得ろう。此の義挙と企てた連中を天誅組と称つたのは、其の結盟を仰いだのい中山忠光で、当時侍従であつた。此の企て井伊を執つて、また、土佐の吉村寅太郎、三河の松本源三郎（奎堂）備前の藤本鉄

横原製

三郎（鐵石）であつた。勿論背後さい長州の桂小五郎、久坂義助、前後の真木和泉守がみた。当時京都の朝廷さの倒幕の気運が盛んで、長州の屈り抑しで、表面大和行幸を名として、極右風潮を駆り、薩摩土肥加賀久留米の藩兵を呼集して江戸を親征し一挙王政復古とする第一の烽火であつた。天誅組は行く所として成功しなかつた。此子忽ち幕府のいる所となり、土佐呉大和行幸お取り止め、勤王公家卷の禁止、長藩御門守衛免職となつたので此義挙は踏潰されが、髪原の変死戦をやつた外別る変幕府を敗れたのい是ことであつた。此の一挙の倒幕の烏効の先駆であつた。松本藩

本吉村時雄と称したが、伝蔵の長物と迎えられた長物は、
節を変じ志を時務に致したと云いたいのである。蓋し長物は
俗論者の手本にもなるべきものであるから。北人十九歳なる
から智力人に勝れ公卿の間に珍らしい人と云われたる北人
の時、八郎右衛門流大砲の目録を授けられたと云う。
こゝに最も関係ある北の一挙で、幸越前藩の軍艦
を奪ってあるべき筈の長物が手の平を返すごとく
変ずるに誰れが相応に得よう、保し難時の形勢
は朝夕を図り難いものがあった。天皇保組寡兵を
率て幕府と奮戰した名将の敗亡を先けた。幕末
の程く兵略に暗いことは、いずれも兵を以て幕府を戴く
した壮年のこれが始めて、幕府を動かしたことは一面

が、夜無川は、中洋うのが、一切を相手とする面目が
うへ出るので合はなかつた。この挨拶の良かつた。感謝した。
其心が即ち合の成功を祈つた所以である。言うまでもなく自分
の四誕を忘れず、年々相を祝ふ。無き宴は恥入りながら
君の寄席の者人に戦はしめんとすると雖も祭り合つた
小林は北の名古屋の名士の特別牙郎の海老の豆相を
私の長寿を祝まるとて始まれた。北見は仲間の自粧で
の技巧を相手にまつた。茶心に一年を暮した。又へれが、た
ちまち、私の北海の者を[illegible]ものが、小林の寄席
を作るまるまで愛者することもれた。（五月廿一の記）
の四技場の開場日数の今十三日間であるが、日数と就て
い変（憂）がある。あゝ七年三月深川の懐の無行から

時天十日の生まれが、見前の八日間であつた。但し十
日間とうつて高後の十日目は幕内力士は登場
北のとおさんとん相撲と云ふ。今年おさんとんデーと
云あれども。全体昔しの婦女子の見物を許さうとも、
笑を見せることもしたが、土俵の容色の美見の結
つたのが、再来婦人も参詣の自由を得たが、そうなる者
は十日一日は婦人も入場することがある。保し幕
内力士の出る相撲の見る足とあつて心あ
る婦人は実のつて、おさんとん相撲の祈がある。初日十
しとこのが、おさんとん相撲の祈がある。初日十
日間とも時天十日とこの雨天の休場しながら、実際十
日続くことはうつたが、明治廿一年六月から時雨

八、八、九の十の間と極まる。（此、既に大正十二年相撲部内を脱出する件が起つたのだ、積立金問題から端を発した）一日を増しても十一日となられた。此年から国技館が大いに繁盛つき、毎日数千の客を去らしめることが起り、国技館楽屋や移動倫も起つたが、其を行はんず、セメて日を正長まくしとあつたこと十三日のと云つたのである。初め国技館の建築の成つた時、年寄連中は其の度ちがい、コンナに度ちがい場所をもどうするなどと云あれが、実に度ちがい狭い所か、今日は場所を上げるやうな盛況を見ることあつたれば、相撲界の為めに喜ぶべきことが、今度の場所も此奇の収穫があつたと思はれる。

の御里城後で芳行の移転「高志路」に掲載した。「高志路」に掲載した。「高志路」に掲載した。

叙上のいろ〳〵を渡んで見ると、真に博士の経歴の一端を渡んでいろ〳〵（博士の）を通じ博士を招するらしいが、自分へ之んを博士と思ひ主つたが、其の技術と思ひ出すまゝを倫次郎と書きつけ、湖を得て味作を加書き直す事とした。

先づ思ひ出すのは、博士の文筆を出版する筆のあつた陸のまゝ、確かに博士の還暦を祝する前駆の仕事であつたと思ふが、北斗の最記者の服部宇之吉氏と共に大で博士の筆法を受けた二三子であつたが、自分も之んを参加した。任書を作ると、文筆の出版も飯塚氏の斡旋で

自分の喜に満ちたりた。殆ど星岳侍士も自内の不満であつたらうと想像さる。又伯の服部氏の言ふ所の何分の七酬金が甚だ少きのみ、立鄙家住の浜殿の八郎子を印刷する位の過ちとあれば、自分の三万円位の資を卿里の門生から募るから、もう少し張り込みなさいと申出したに、服部氏はぐく去こび、荒し美が出来んは仕合だとあれが、自分は直ちに永原弘業殿時代の門生の名簿を捜し出して調べると、生存者も相当あるので、自分から勧誘状を出すと、後々存異が出て来たり、殆ど額を超過したに。こんなにも先き童野先生の文集が出版されしみて、星岳先生は内心なんと奇しい出版を欲せらるやらん又受けたかも、見て微あり、美濃版で活字揃ふ、相当

樣原製

字数の生き業窮さたるを瑞瑞版の附し豊城文集の三冊が成つた。（或は二冊で足りたこと）さんは侍士の苦辛の校訂を経たことであつたが、侍士は大いに悦び、此の日と共に立六のこゝろに、赤つの山の上の亭に招、えて祝の響宴を受けたことがある。其席の時新侍士のみは日本義民塔士もあれば、自分が年若き故を以て謝辞を陳べることもあつたのに、をんなりとして自分が亦年若き為めなることを義がついて殆陪した。

星岳先生の墓碑の賀を催し社侍も自分は冬かしたが、何故に多分直接数を受けたこゝろみが分らぬかつた。先生は家族も四伴されたと思ふのが北庵で先生は謝辞と共に其の場

歴を語られた。自分は先生の口づから横谷宕陰の門下であつた頃の修学談を聞かされたのは初めてであつて、涙ぐましい苦学談であつた。当時の漢学塾はどこも苦学の道場であつたに相違ないが、先生の学僕として宕陰の塾にあつたから、その苦労は いとゞ いうまでもない。殊に宕陰の郷のことゝて学僕なる先生は ある地点から、毎飲料水を運ぶことが大切な務めであつた。尚宕陰先生が講義をされた後の残り汁を戴くまでは、時へいつもお腹をしたの草鞋穿きでの往来であつたが、寒中でも足袋の用意は無かつた。玄関先で火鉢を借されず先生の帰宅を待つてゐるうつたとこゝろが、内を書物

を懸ろうとを持つの間を読むもさんれうこゝを想像もまるが、足袋も穿かず、素足の草鞋穿きで寒気と闘はんれることを想あと、隣人のつらかつたことゝ、北条氏の閲歴を聴かされた時の、苦学の時涙を禁じ得なかつた。

侍士の斯る苦難の学僕時代を経られた北条氏の勉強をされたとい。幾年経ての後が楽しくなられたが終る頃、塾頭に推されて、宕陰先生から養子にとの勧められたとい、学問先生の自白である。先生の志す所があつて、先生の学の力がめざる日師の位置を偏しれかの、之を以つて想像することが出来る。

先生が業成つて帰郷されたのは、天保元年であつた。私の郷里丹後に学校を建てられこゝに先生を迎へ

あつた。学校は所内有志の建てたものであつた。弘業館と云ふのが
矢合先生の命じた名であつた。位置は外城の新御所
辺の袖の業は路であつた。建物は大きくもなく小さくもなく
門を入ると玄関があつて、玄関を入ると二三十畳の大廣
間があつた。其の隣りの床の間の八
畳は四枚あつたが、孔子の像を掛け
た、その床の間の右の押入が書籍庫で、左の一方の押入
は塾生の夜具棚で、先生は毎日此の座敷で多
数の塾生に講義をした。塾生は座敷に臥して、此の床の間の後
ろに一室があつたが、そこに七塾生がゐた。ザットしんと
した狭い塾で、廊下は傾くので、先生の室があつて一室は先生
の書斎で、その隣つた奥のまつた室が寝室であつた。一

方の隣室には塾生の共同で三合を取
つた。感心なことであつた。ある時も先生は三合と呑みさ
んと、学生と同じ飲合を取られた。漢学塾の三合とは廻
合の様なものであつた。先生は酒を嗜まれたが、時々人の宴合に招
んで酒菓を帯びて帰られることがあつたが、塾中で飲ま
んということは絶対に無つたやうである。宮石生の自分が最年
少者で、塾歴五年目の者は他の塾生と合うの給仕を
やつた。先生は自分を特別に監督されたのみ、先生の
出方を掃除するのみ、自分は接伝であつた。又先生の
講堂で私の机を構へてそこに座をしたのみ、先生
の行動の自分が最も親つたが、自分も確義を人に
あつた。

北斗夜叉八妻等々先輩で相南学問の道入れるもの沢
諏訪山の大唯甚二郎の人に、あ姉子孫方々田辺義
とのあと三浦春作（後ち宗春と号し漢方医）四郎
が、此の北斗（の道）中の論語の輪講をやつたが、私もどが年
八素読が書らで、毎日漢書を一冊宛ものが日課で、先生
八毎日、著し宮を穿いてもつかつて、家をさして、こんハ
何とまて質された。コンナ事も前後清書と史記を凡て
通さしたが、何も記臆を残くらいが家にはの大体渡める
やうなもの。時上級の大人連い文を作つたが、五六巻の課題
の詩を作らせられて先生に褒められることもある。
折角設けられた仙台藩の校舎が狭隘を来けて師範学校の移
つれの何年であるかが記臆の無いが開校二三年の後

榛原製

であつたろう。自分も移転後間もなく師範学校に移つた
記臆がある。北斗と曾つて為た郡長名和後が長
られた時自分八日々通ふて名和
北斗と為るべき名流の建物ひあつた。えの事田校と
比べられば建築も立派で広くもあつた。校舎とても不高南
であつたと思ふ、自分八家庭の都合で新しい市街北番
番地中條氏の西隣の家に帰つてから、其後の事八知らない
が、確か一通り批評の稿を拵へて先生を訪ひ答辞を貰
ひたことがある。家庭を帰つてから築地の肥田の竹塀をしめと
して毎日一里餘の道を往復して通学した。明治四年秋頃
学校が設けられて、そこで英学を修めることと
なる。全く漢学を廃したのでの先生の渡辺七郎さんつた。

明治八年頃学校を辞し上京され東京英語学校に入
られが、自分が身を寄せてゐた親戚鹿倉美雅の家へ先
生が来られて旦らく滞留を強止められたのでこゝに端なくも先
生に会はれた。先生は仕官の希望で上京されたらしく、志き
りに新聞紙を調べてゐられ、自分司法官の登庸を
望んでゐられたやうな見受けられた。重野博士あたりを頼って修
史局に入られたのは何年であつたか、自分はよくは覚えない。兎に角先
生日の修史局に入られて職を得られたのである。先生が四史の専門
大家となられたのも帝大教授も端をこゝに発してゐる。
先生は豊城の藩のお系の外城を出られた時自から命
名された藩の外城在住の化石とも云へるべきものである。先生

樣原製

の勉強は酒次記されたことを思ひ出す。豊城は外
城と言ふことである。けれども、実は先生の抱負が働きこまれて
ゐるのである。支那の干將莫邪の名剣の埋葬してある所の
豊城縣で、此の名剣のあるが故に繁雲が棚引くと云ふことも
が後漢書に載つてゐる。先生は豊城の地名を此名剣
を自分に擬し、俺のコシナ雲もくすぶつてゐるのの
名剣の埋没してゐるのと一般だとの意を寓されたの
であるが、先生の上京は雲を登るの第一階であつた。先生が
修史の局に奉仕して修史局の大家となられたのも、当然
といふべき運命であるように、先生は宏陰の門に
入られたと修め、左傳の特に得意であられたが、
の史学は支那の史学であつて、先生が学んだ、先生が学ぶ事を楽しんだ当時は四史

又全く面白せず、地方の豪族の宴席日々賑んで、四方八方に
すると談が起ると、先生の赤面さんるなど暗かつたとは正浦
宗春から當て出すくれることがある。当時は漢学時代さは
支那人史が偏重さん、四書史は湖南さんに確
かに敵點と云い張はられるかいが、学殖ある先生が四書と梅南の
往果義と大家とうるんれのもの思儀はるかから仏業設時代
の先生をおるうるから又は新潟の若子の勧奨をも云
へべきものあらう。

先生が帝大の教授となるまでは小石川の表町に住居さん
をこの頃されたが、拙宅が広いうれので、志ばく滞居
先生の訪問を受けた。其の訪問は先生の家庭
の問題があつて、自分が其の解決を依頼されたあ

つた。先生の嫡子の婦人の自分の政友加藤氏の娘であ
ることとて全く知らぬ仲柄だが、家庭の折合がよくない
のは離婚の斡旋を求められたので、自分も困つたが、氏も
ろくが多と談じて其月四と達したが、自分も面倒と立つ
て随分困つたこともある。先生の長男が侍医勝の宮廷井
耕一郎さんの嫁さんであることとて自分の全く知らぬうちに、
井が憲法を受持つて早大の教授であつた関係から、井が
肺患で平塚の病院に這入つてゐるのを見舞つた時、看護
の婦人が先生の長男であつたことがある。当時
先生は一世を風永井柳太郎さんの嫁さんとされた時も自分の斡
旋を頼まれたが、先生は成るべく事の成り難い事の先生
と自分が断る家庭上の交渉が多かつたので、志ばく先生

と性後し先生の家に郷宅を営まれたこともあるが、
先生は晩年中風に罹られたが軽症であつたが、毎次の手紙は嫡
子の代筆であつたが、自分が宗家の継志国の碑文
を頼んだ時は、自筆で長文を認められた。その文は拙筆
ながらも四方の識者の感嘆を招けもする。今残つ
てゐる遺物は戊辰の兵燹を免かれて、一時永泉の寄仮
を寄附し、そこに先生が起臥されたゆえに、
先生は晩年貴族院の勅選議員となられたことの望もあつて
大隈侯の斡旋でどうかしてこれかとの相談を二度ばかり
ともあるが、当時はいろいろの事情で、実かしこうかつたが
其間に先生は鬼籍に入られた。女の葬儀も自分の典
つたが、夫人も間もなく黄泉を去られた。

横原製

ラヂオ・ドラマになる 逍遙の〝役の行者〟

八・一〇 初演當時の諸優が出演！

午後八時十分のラヂオ・ドラマ邸内逍遙作、河竹繁俊補訂、須藤五郎作曲の「役の行者」は大正十一年「新演藝」誌上に「行者と女魔」として發表されたもゝ

主要部

であるが、逍遙の作にはすでに同じ題材のものが大正五年「女魔神」として發表されてゐる、「行者と女魔」は、實は作者が「役の行者」（「女魔神」の改題）を發表する前に脱稿してゐた作に多少の改修を施したものである、この作品は、逍遙の作中で最も哲學的であり、人間の内面生活の力を象徴せんとしたものといはれてゐる、自然と人間との闘爭がきはめて強く、哲學的に描破されてゐる點、作者の新鮮

怪奇な

想像が藝術的表現を與ふる得る傑作の一である、初演は大正十五年築地小劇場で小山内薫氏の演出によつた、今日放送に出演の青山、汐見、岸等の諸氏は當時の出演者である、尚その後帝劇、寶塚、國民座等の大舞臺にも上演された、配役並に役柄は左の如くである【寶塚橋公、右上より岸輝子、月野道代、上田眞平の諸氏】

…配役…

役の行者　青山　杉作
韓國の蹇足　汐見　洋
捕り方頭人　御橋　公
女　麗　岸　輝子
娘　月野　道代
前鬼　上田　眞平
後鬼　戴田　信

音樂　ラヂオシテイ・オーケストラ
音樂指揮　飯田　信夫
演出　青山　杉作
解說　河竹　繁俊

大和の

國山上ケ嶽の岩窟に結跏趺坐してゐる役の行者の前に、韓國の蹇足は師の不在中に禁を破つたとを詫びるが、行者は許さない、汝は名聞の餓鬼おやとすがる蹇足を突きとばす、蹇足は淨閑しい自分の心に恥ぢ、煩悩する、そこへ村の娘がやつてきて、蹇足を伴ひ山を下つて行く、一方、行者の老母は、山を越え、川を渉つて、盲目の身をも忘れて行者を訪ねて來るが、これを知つた行者も

肉親の

情に心が一時動搖するが、所へ忽爲とあらはれた美女が男子入を望んで飜かしく行者を誘惑するや、行者の一喝にあひ、美女は魔神の正體をあらはし、怒ちの谷間へ駆り込んで了ふ、こゝに行者は誘惑を克服し、天上天下唯一の大いなる存在「我れ」に到達する、そこへ蹇足がきて暇乞ひをし、更に行者の母が捕り方の役人の人質となつてゐることを告げ、下山をすゝめるが

行者は

きゝ入れない、おれには母はない、あるのは、大いなる「我れ」の力ばかりぢやと行者はいふ、こゝで行者と蹇足とが問答をするが蹇足は遂に山を去つて行く、行者は我が定業ついた後までも「力」の敎へだけはつたへておかう、と石窟の上の大岩を見て「我が念力と行力とにより立ちどころに金剛藏王の像と現ぜよ」といつて

孔雀經

を誦しはじめる、その時捕り方あらはれ捕へんとするが、行者は動かず、その母は懸しくも殺されてしまふ、行者大喝すれば天地暗轟、岩石雨の如く降り、やがて開れ渡ると行者の姿はなく、大岩は金剛藏王大忿怒の像に變じてゐた

塚越繁子刀自は、星亨氏の先生塚越鈴彦氏の未亡人にて、八十有餘歳の老壽を重ねて、其の江戸、明治初期の談話は眞に我々を其境地に置かるゝ妙趣が湧き、しば〳〵高須梅溪氏と共に、耳を傾けたものです。

本話は未發表のもので、この機會に、筆者の「續女百話」の初頭を飾ることとした。（篠田鐵造）

幕末明治 女百話（續篇）

移り行く世の態

塚越繁子

◈唐人と犬

昔、横濱に着いた唐人（西洋人のこと）が、江戸へ來る時は、物々しいものでした。警護の役人が三、四人馬で横濱から附いて來たものです。唐人の服裝は、今でいふ何ですか、足まである、長い黑の上衣を着まして、裾の方は見えません。四人位の役人が、馬に乘つて、後先を警護して來ます。唐人の來る時は、町内の木戸を締めますが、その木戸に近づくと開けるのです。其當時は各町内に木戸があつて、平常は開つ放しですが、事が起ると締めます、唐人は今で思ふと、ステツキでせうか、棒をもつて――鞭かね、ソノ棒を持つてゐるもんで、みんなが『唐人はおつかない、アレで毆るのだ』と云つてゐました。長い靴を穿いてゐたので、踵が見えません。それで『唐人は踵がない』なんかと云ひました。そして一生懸命になつて來るのですねエ。騷ぎがえらいから、犬が出て來て吠えます――日本の犬ですから、耳が小さくて、體が大きいでせう。飛びつくやうに吠えるのです。若し唐人が怪我でもして生麥事件のやうになると、お金を取られるからいけないといつて、犬を引つぱつて繫いでしまいますので、喰ひつきはしませんが、無性矢鱈に吠えるんです。唐人は髯を一ぱい生やして、恐い顏をしてゐますから、吠え立てるので

す。そしてみんなが『今に日本中唐人に取られてしまう、どうも困つたことだなア』といふやうなことを云つてゐました。

私の實家は、本所でしたが、唐人の一行は、竪川通りから深川へ出て、永代橋を渡り、築地へ廻り、横濱へ歸るんです。犬を捕へて置かないと、役人に叱られるので、大變でしたよ。

それから、明治になると間もなくと思ひます。『針金便り』が出來て――電信ですね。日本に繩張をしたといふので、これも大騷ぎでした。『日本ももう末期だ。唐人がこつちまで、繩を張つた』といふので――其の時分は、學問もありますせんからねエ。其頃流行た唄が――大津繪ぶしで出來ました。それはかう言ふのです。

阿米の世に、日本近く、寢惚て流れ込む唐模樣、黑船に乘込み八百で、大筒小筒を、スポポン打鳴し、羅紗猩々緋の筒袖繻絆。黑ン坊が水底仕事する。中にも髭の深いチヤガタラ唐人が、海を眺め、銅羅によう鉢よう叩いて、チクライ〳〵キンモーパーパー、阿米利加さして貰ひし大根土産に、急ぎ行くポコポン、ポンポコポン。

こんな事を唄ひながら、髭を拵へて踊るのが、流行りましたが、今から思ふと、實にをかしなものぢやありませんか。

◈御停止藝妓

序に其頃の遊びの御話を少し申上げませう。當時は唄や踊をやる人が澤山ありまして、中には御家人などで、芝居の裏木戸から入つて、笛を吹くといふ器用な人も居る位でした。大小の中味は竹光か何か知れやアしませんが、なか〳〵しやれたもので、半分幇間です。藝がよく出來るから、藝妓などは困る位で、今のやうに遊んでゐる事は出來ません。長唄もやる。ソレコソ一中節、清元、何でもやらなければなりません。それから其頃は、時々御停止で、三味線を止められることがありました。それは御大老が死くなられた時が十日。御老中が七日。若年寄が三日間。鳴物を止められてしもふ。さうすると、柳橋、堀の藝妓に――堀の藝妓に小萬といふ名妓が居ましたが――『御停止藝妓』と云つて、内證で遊びのお相手になる。誰々は『御停止藝妓』だといひまして、圍碁でも、繪でも何でも出來て、三味線なしで御相手をしたものです。堀の小萬などは、口三味線でペンともツンとも鳴らさずに踊つたさうです。

昔は皆藝で賣つたもので、又禮儀も非常にやかましく、女中でも藝妓でも、お刀の持ち方から心掛けてゐなければなり

ません。床の間の刀掛には、紫の袱紗がかゝつてゐますが、刀はチカで持てませんから、着物でかうして（型を示めされた）鞘を持つのです。これらの事を思ふと、近頃のお茶屋は楽なものですと、明治になつてから小萬がよく言ひました。

大川筋の御茶屋――青柳でもですが――梅川でも、川長でも、船のことには馴れてゐましたが、その時分には、山の手の藝妓は、船の乗り方は分らなかつたものです。下町の藝妓は、屋根船に乗る時には、足を先きに一寸と乗せてから、頭の方を入れますが、山の手の藝妓は、頭から先へ入れる。それでスグ分つたといひます。

八百善（山谷）は小供の時分、番頭に連れられて往きましたが、女中は少しもお世辭を云ひません。着物は全部木綿でどんなに若くても黒繻子の帶、お白粉は極く薄い化粧をしてゐました。

青柳（東兩國）でも何處でも、床の間の刀掛には、紫の袱紗がかゝつてをり、亂盆があつて、袴でも羽織でも、女中がみんな疊んで置く。今の女中はみんな疊めないと、これも堀の小萬がよく云ひましたよ。今の藝妓は楽なもんだ。『あなたのお袴どーれ』と云つて訊いてゐる。今は堅つ苦しくされたらお客が困るでせうが……その時分は、御武家相手だもんですから訊かなくとも、これはどなた様、これはどなた様と、チヤンと覺えてゐました。今は女中でもまことにお世話をしないと云つてゐました。

青柳の棧橋は、兩國のお上り場の、丁度眞向にありました。お上り場と申しますと、公方様（將軍家）が――鶴御成の時、大抵往きは堅川筋を御成になるが、御歸館には、千住の方から御座船で、綾瀬川から隅田川を下られます。其時の御警護は向井將監様の御係で、お船唄を歌ひながら、川を下る。まことにシーンとして靜かなものです。それから今の西兩國の新柳町の河岸へ御上りになり、御駕籠で御本丸へ御還りになります。其場所を『お上り場』と申しました。

今申した青柳の棧橋が御上り場の眞向ですから、非常に喧ましいものでして修繕するなど、一々其筋へ屆出しなければかゝれないほどでした。

◆長州様燒討と女乞食

昔の長州様の御屋敷は、今の日比谷公園の處でした。馬場先御門から出ると、スグでした。長州様の御屋敷を壞した時は、私が多分十二の時で、江戸中の町内から、鳶頭をひつばつて來て私共の出入の權次といふ仕事師も、乾兒を連れて出

◆唐

昔、横濱に著いて
しいものでした。
來たものです。唐
る、長い鼻の上流
の役人が、馬に乘
時は、町内の木戸

塚越繁子刀自は、星亨氏の先生塚越鈴彦氏の未亡人にて、八十有餘歳の老壽を重ねて、其の江戸、明治初期の談話は眞に我々を其境地に置かるゝ妙趣が湧き、しば〳〵高須梅溪氏と共に、耳を傾けたものです。

本話は未發表のもので、この機會に、筆者の「續女百話」の初頭を飾ることとした。（篠田鐵造）

幕末明治

女百話（續篇）

移り行く世の態

塚越繁子

◈唐人と犬

昔、横濱に着いた唐人（西洋人のこと）が、江戸へ來る時は、物々しいものでした。警護の役人が三、四人馬で横濱から附いて來たものです。唐人の服裝は、今でいふ何ですか、足まである、長い黑の上衣を着まして、裾の方は見えません。四人位の役人が、馬に乘つて、後先を警護して來ます。唐人の來る時は、町内の木戸を締めますが、その木戸に近づくと開けるのです。其當時は各町内に木戸があつて、平常は開つ放しですが、事が起ると締めます、唐人は今で思ふと、ステツキでせうか、棒をもつて——鞭かね、ソノ棒を持つてゐるもんで、みんなが『唐人はおつかない、アレで毆るのだ』と云つてゐました。長い靴を穿いてゐたので、踵が見えません。それで『唐人は踵がない』なんかと云ひました。そして一生懸命になつて來るのですねエ。騒ぎがえらいから、犬が出て來て吠えます——日本の犬ですから、耳が小さくて、體が大きいでせう。飛びつくやうに吠えるのです。若し唐人が怪我でもして生麥事件のやうになると、お金を取られるからいけないといつて、犬を引つぱつて繋いでしまいますので、喰ひつきはしませんが、無性矢鱈に吠えるんです。唐人は髯を一ぱい生やして、恐い顏をしてゐますから、吠え立てるので

青柳（國栄）でも何處かゐるつてを、亂盛が多の女の盛りで、今の女の盛りでは、よくひなましたもんだ』と云つて、お移りに」

ました。

大川筋の御茶屋——

ですよ、明治になつて、これらの持つのです。これらの刀は、ちゃんと、船のことは、船の乘り方も、船頭に乘る時、山の方を入れますが、山でクダンたとい、八百善（谷山）は小使の方、女中は女しもお仕の方、女にも男綱子にも、女にも、女にも、女

たんですが、朝早く方々から集つて、鳶口で壊してしまつたんです。そして火を點けて――長州様の御屋敷は立派なもんだつたさうですが、御殿を壊して、ソレに火を點けると、本所邊りでも、桃色の煙が騰るのが見えました。『青い煙だ。あれは御佛間だらう』などと云つてゐましたが、上野の戰爭の時もさうで、銅が燃える時は、青い火が出ました。其後御屋敷跡の御池で、蛙合戰があるといふので、大層これも評判になつて、みんなが見物に出懸けました。敵味方が――源平に別れて、大きな蛙が『がアがア』と云ひます、と小さいのが咬み合ふんださうです。勝つたのが、死んだのを背中に負つて歸へるといふことでした。

ソレが今日、日比谷公園になつてゐるのですから、變れば變るものです。

それから日本橋葭町に「よしや」といふ、有名な元結や油など商ふ家で、そこの娘が、長州様へ御奉公に上つてゐたのですが御殿が壊はされた時、危ないからどうなつたろうと、心配してゐましたら、御國の方へ御供をして逃げてしまつたのですが、よしやでは娘がどうなつたか、分らないから、心配して居ますと、或晩、眞夜中に、店の戸を叩く者がありますから小僧が臆病口＝昔町家などの上戸に附てゐる小さな窓の事で す＝を開けますと、一人の女乞食が菰を被つて立つて居るではありませんか。小僧がびつくらすると、其乞食が、小さな聲で、旦那様にお目に掛りたいと言ふ。そこで主人が出て、よく〳〵見ますと、自分の娘の部屋方（女中のこと）なので、この女が主人の手紙を、髪の中に祕して、長州の萩から、はるばる忍んで來たのでありました。「よしや」では大變驚きもし、又喜んださうですが、こんな忠義で、強い女が、チョイ〳〵ゐるたものでした。

筆者このお話を耳にした時、實話は小說以上の味のあることを泌々感じ、かういふ話から、この忠義の女中――女乞食のことを思ふと、想像に尾鰭が加つて、何ともいへない、維新祕史が考へられます。

長州征伐は、萩まで行かれなかつたとか聞いて居ました。越後高田の御領主榊原式部大輔様はお先手で、攻めに行かれたのですが、私の母方の親戚の中に、御作事御用をしてゐる者がありまして、御陣屋を拵へる爲に、大阪まで參りました又榊原様の外に、出羽の庄内の酒井左衞門尉様もお出になりましたが、榊原様は大層お金を使ひ御家來も殺したと言ふ事でした。長州方では降參するふりをして、兜も何も取つて＝『とう〳〵兜を取りやがつた』とよく言ひますが＝兜も何も

とを聞きましたが如何ですか。

それから此騷ぎのあつた後、暫らくの間、何か首のなくなつた物が出來ると。例へば、大工などが金槌の首がとれたやうな事があると『こいつはいけねェ、掃部様だ』なんかと申しましたが、實に面白いことを言つたものです。

◉試し斬と伊勢參りのハチ

犬の伊勢參りのお話ですか。白犬は人間に生れ代つて來るものだと、昔はよく云つたものです。さうして昔は、町人が表向犬を飼ふといふことは出來ませんでした。ソレは御扶持のない者は、犬を飼ふ資格がないと言ふのです。從つて犬がよく試し斬に斬られた樣な時などでも、御扶持を貰つてゐなければ、屆けることが出來ませんでした。

私どもは町人ながら、田安家から御扶持が出てゐたので、私どもの飼犬のハチは、屆けてありましたが、御扶持のない家は屆けることが出來ません。ですから昔は、御扶持は大したものでした。

試し斬がよくあつたものでしたが、犬を斬ると、刀が犬の毒で黑くなると云ふぢやアありませんか。そこであとで直ぐ研がせないといけないさうです。或研師の話に、一寸刀を見れば、ハーン犬を斬つたなと言ふ事がすぐ分ると申しました人間もよく斬られました。私の御奉公してゐた御殿は、筋違見附の處でしたが、駿河臺でよく斬れましたが、淋しいところで、『人殺しイ〳〵』と云つて逃げて行く聲がよく聞え、實に忌なものでした。徐々世の中が變になつた頃で、辻斬は薩州の人が多いといふことでした。

伊勢參りをした犬は、人間に生れ代ると言ふので、町内やなんかで、犬に金を出し合ひまして、麻で縄を拵へまして、木札を削つて、早い話が、本所ならば『堅川通り何某の飼犬』と書いて、首に括りつけて、どつさりお賽錢を入れた袋を、首に引かけてやる。さういふことの世話を燒いてやる人がよくあつたもので、仕事までも休んで、品川まで送つて行く、此の犬ばかりには、雲助も物を取るといふ事もしなかつたさうです。

さうして外の伊勢參りの犬友達も出來て來ますし、立場々々へは、犬の爲めいろんな物が出てゐたので、喰べ物には困らないで行くのです。伊勢では神主様が、お賽錢をチヤンと五十文なり、百文なり取りまして、ペタンと判を捺して、御札や何かを油ッ紙に包んで、手紙まで付けて、何日に參拜したと書いて、背負して還へして下さるのです。どん〳〵歸つ

冠らないで、今にも降參するやうな振をして、油斷を見せ、地雷火をつけ、散々德川方を惱ましたさうです。斯樣な譯で、德川方は戰が旨く參らなかつたのですが、江戸ではそんな事は分らないから、斯う言ふ歌が出來ました。

長州さんと云ふ人は

一に　家老がふみはづし　二に　日本を騷がして
三に　三條味方とし　四つ　夜討に打込まれ
五つ　軍にはいぼくし　六つ　謀反が現はれて
七つ　長門の運のつき　八つ　屋敷を壞されて
九つ　今度の御征伐　十で　德川萬々歲

此外長州と薩州と、德川家とを入れた歌も出來ましたが、之も德川家の萬歲を謳歌したもので、當時の江戸の人氣がどんなものであつたが御分りでせう。それはかう言ふのです。

萩はしほるゝ　くつわは錆びる
五月葵に花が咲く

御承知の通り、萩は長州樣の御城下、轡は薩州樣、葵は德川家の御紋です。

◈櫻田騷動と鐵張の駕籠

掃部樣の騷ぎの時。家の若い衆が、芝の秋月樣へ、御節句物をお納めに行きましたが、御大老の御登城は、四つ時、御下りは九ツ時で、丁度其御下り時に、雪は降るし、向ふは見えない程です――すると突然『寄れッ』と大聲で云ふから驚いて見上げると、鎗の先きに、生首があるぢやアありませんか、驚いて腰を拔かしたのです。腰も拔けませうさ。子供ながら今でも覺えて居ますが、若い衆が漸と家へ歸つて來ての話。ところが本所の方では、そんなことは知らないから、櫻田御門で、御大老の掃部樣が斬られたとか、鎗で突かれたとか、雪は降るし、何が何やら知れないんで、大騷ぎでした。此事件から後は、警戒が嚴重になつて、御大名衆の乘物へ、鐵を張ると言ふ事になりましたから、日本橋の乘物町に、乘物師が澤山ありましたが、大變忙しくなりまして、朝から晩まで、カン〳〵チヤンチヤンと大變でした。

奧女中などの御駕籠は、鉄打ですから、さうはいかないが殿樣方のは、みんな鐵張りになるんで、忙しくつて大變な騷ぎでした。壹萬石以上は、減多に馬で御登城はありません。大抵御駕籠です。其御駕籠の兩側を、股立で、徒步で行くのが御駕籠側といひますが、掃部樣の御駕籠側は、斬られてしまつたのです。又本統かどうか知りませんが、掃部樣の首は石川五右衞門の首を梟した京都の七條河原へ梟したといふこ

て來ますが、うちのハチは歸ると、暫くして淺草の觀音樣の御堂の下で死にました。ソレが觀音樣から知らせが來て分つたのです。私共では觀音樣の世話人をしてをりましたものですから、知らせがあつて、引き取りましたが、態々觀音樣の御堂に往つて死にましたのは、感心なものではありませんか。死體を回向院に葬つてやりました。

◈河原乞食と見附の亡者

役者は『河原乞食』と言ひまして、氣の毒なもんでした。こんな事を言つたら、役者に憤られるか知れませんが、團左衞門といふ淺草に、おこもの頭が居て、なか〳〵威張つたものでしたが、役者はソレの支配の下にあつたと聞いてるました。所が相撲の方は、天下の旗持と言つて、大變に尊敬せられ、殿樣の前でも胡座をかける位、さういふ譯で、役者は、實に卑しめられ、時には非人などと同じ樣な取扱を受けました。例へば非人や葬式が通る時、向ふから御大名の行列が來ると、殿樣の御駕籠をグツト上にあげる。つまり穢れると言ふのです。所が役者の通行も同樣であつて、御駕籠が上る。千兩役者でも何でもたまつたものではない。實に氣の毒なものでした。又町人の葬式は見附々々を逃げるやうに避けたもので、兩國から淺草方面の御寺へ行くにも、淺草見附を通らないやうにする。何故かといふに、見附を通る時は『何々といふ名で、寺は何處で』と屆けるんで、すると『亡者一人通れ』と大聲で云ひました。そんなことを云はないでも、何とか云ひようがありさうなものですがねエ。それで見附を廻らないやうにしたのですが、實に變つた事をしたものです。

◈壜が欲しく香水は鉢前

御典醫の伊東玄朴さんが横濱にはじめて行つた時。お土產に靴と香水を献上になつたんです。私は其の香水の壜が欲しくつてたまらない。その時分香水なんて知りません。それから奧樣が『これをつかはす』と仰有つて、其香水を下さつたのですが、壜が欲しいものですから、香水を鉢前にあけちやつたんです。すると大變な匂ひなんです。お側の人達が、その香水をかいで、こんな所に撒いては、くさくつて頭が痛くなると云つて、水をかけましたが、なほ一週間も匂つてゐました。知らないといふことは、しやうのないもので、左樣な事がありました。玄朴さんの御子孫が、今の伊東胡蝶園ださうですね。（完）

東京製

研究らないで、今にも降参すると地雷火をつけ戦々恐々たる徳川方は戦が旨くゆかぬ時は自分の方へ参らぬ方は敵と見なす人は

一に　家老がみな人は

長州さんとこの人は

三に　三條味方として

五つ　軍にはいゆくしと

七つ　長門の殿のつきの

九つ　今度の御征伐

此外長州と薩州と、徳川家の高禄を軍歌

之も徳川家の高禄を軍歌

んなもので あるのだが御分

萩はしほる　くつあり

五月蒸に

御承知の通り、萩は長州

川家の御紋です。

◆櫻田騒動と

掃部様の騒ぎの時。家の

で来ますが、うちの

御堂の下で死にまし

たのです。私共ではな

すから、知らぬがあ

御堂に住って死にま

が。死體を同同院に

◆河原毛

役者は『河原毛の

こんな事を言つたら

衛門といふ淺草に、

のでしたが、役者は

た。所が相撲の方は

れ、駒様の前でも御

覚に卑しめられ、時

た。例へば非人や乞

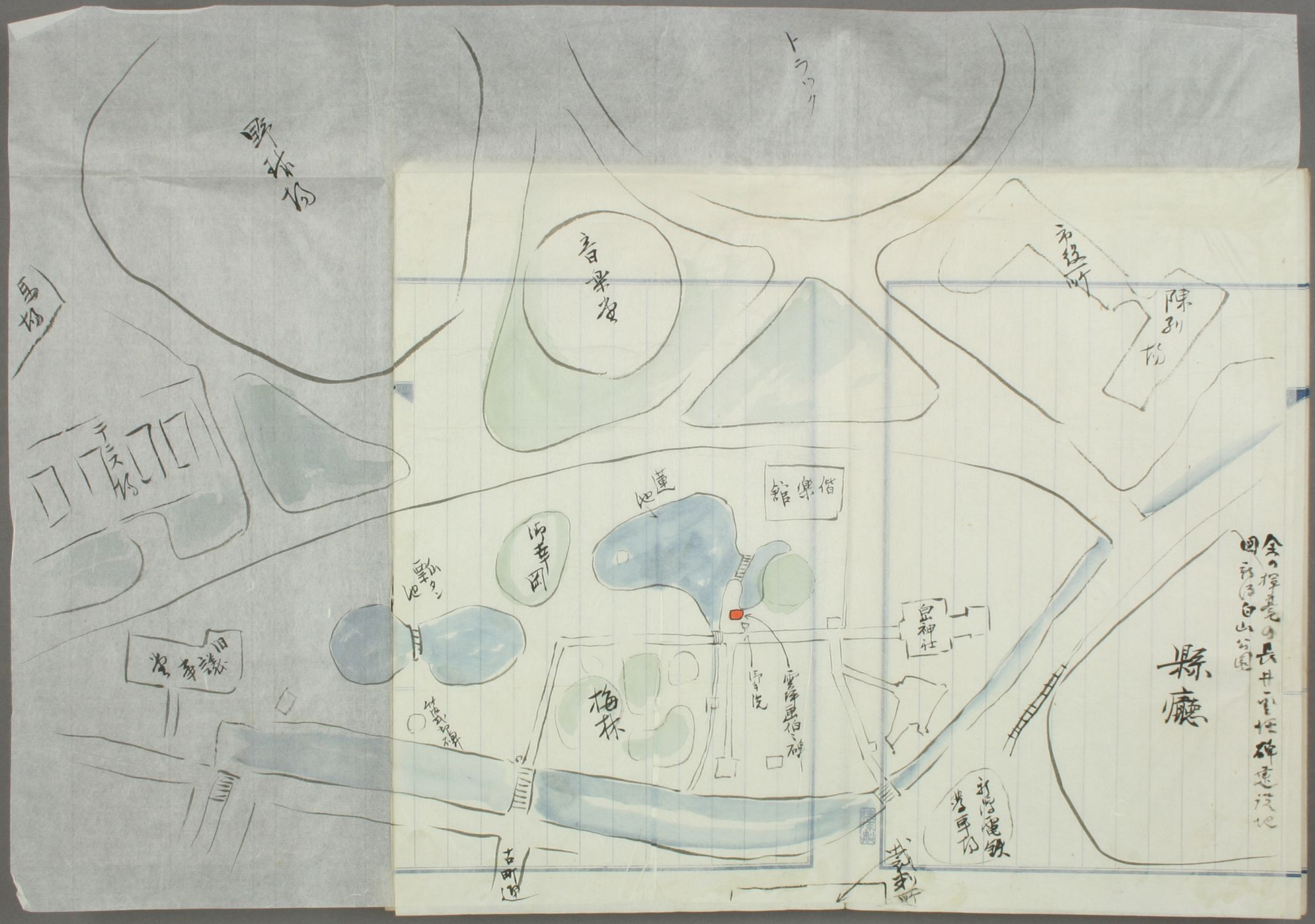
ると、駒様の御贔屓

ふのです。所が役者

千両役者でも何でも

のでした。又町人の

縣廳
貸樂館
息神社
雲洋風伯之碑
新潟電鉄
港車庫
市役所
陳列館


トラック
野球場
馬場
音楽堂
市役所
陳列館
図書館
旧議会
蓮池
借集館
市庭園
歌碑
梅林
皇神社
縣廳
新潟電鉄
古町通

春城會雅集

新聞にづ掲載

早大出身代議士七十名

民家

林首相が第七十議會の最終日に當つて政民兩黨の重要法案審議の遂行を遺憾とし議會の反省を促すべく衆議院の解散を奏請し遂に與黨を有せざる政府の下に異例の解散は斷行され衆政戰三旬、夜來の春雨に洗はれて若葉萌ゆる三日朝戰塵既に收まり國民總意の審判は「反政府軍完勝」を傳へ、混戰の坩堝に中原の覇を爭つた八百廿余名の候補者の中から學閥出身八十名の新代議士が新しく樂分けられた政界の分野に躍り出た、新代議士氏の黨派別は民政が矢張り第一位を占めて三十七名、政友十五名、中立六名、社大六名、東方會二名、國民同盟二名、昭和會三名、皇道會一名、關係者八名で出揃つた新代議士四百六十六名の五分の一を占める進出振りこゝにも年一年と躍進を遂げる「伸び行く早稲田」の力强い姿が如實に描き出されて行く

【民政黨】

多田　満長（千葉）通信社々長（44大政）
松永　東（埼玉）辯護士（昭9推薦）
[illegible]（[illegible]）[illegible]業（35邦法）
三好榮次郎（鳥取）山陰日日社長（39專政）
山道襄一（廣島）元廣島道政務次官
西村丹次郎（岡山）無職（23邦政）
清水德太郎（山形）無職（5推薦）
田岩水（廣島）辯護士（31邦行）

【政友會】

[illegible]　正綱（東京）元文部政務次官（4推薦）
[illegible]野二郎（神奈川）重役（12經濟）
川　重次（埼玉）農業（6大文）
山田義孝（秋田）農業（8專政）
[illegible]島　文治（青森）農業（8專政）
[illegible]田　鋭吉（岐阜）農業（21邦政）
[illegible]木　弘（新潟）辯護士（34推薦）
[illegible]藤　圓三（島根）東京毎日主筆（9大政）
[illegible]本主二郎（和歌山）會社重役（28邦政）
岡竹次郎（長崎）長崎民友社長（5專政）
[illegible]保　畢雄（長崎）農業（31專政）
[illegible]中　亮一（佐賀）農業（4大政）
紹田　直道（鳥取）日清協會理事（4大政）
助川啓四郎（福島）農業（39專政）
岩元榮次郎（鹿兒島）農業（41專政）

【東方會】

渡邊奈邦（北海道）著述業
中野正剛（福岡）著述業（42大政）

【中　立】

風見　章（茨城）著述業（42大政）
田淵豐吉（岡山二）無職（41大政）
[illegible]中　凡夫（福岡）無職（9專政）
會木　重貴（宮崎）農業（45大商）
田川大吉郎（東京）元東京市助役（23邦政）
中原謙司（長野）南信電氣會長（昭8推薦）

【社　大】

淺沼稻次郎（東京）著述業（12經濟）
阿部茂夫（東京四）辯護士（12英法）
中村高一（東京）教師（8專政）
三宅正一（新潟）著述業（12大政）
田原春次（福岡）著述業（11專政）
川俣清音（秋田）著述業（12專法）

【皇道會】

平野　力三（山梨×11專政）

【國　同】

佐藤　資（山形）農業（23邦行）
伊豆藏人（熊本）熊本新聞社員（4專政）

【昭和會】

森　肇（長崎）農業
中野貞吉（福島）鑛山業（34邦法）
春名　成章（靜岡）無職（39大政）

【學園關係者】

安部　磯雄（東京）著述業（元早大教授七三）
鳩山　一郎（東京）著述業（五五）
賴母木桂吉（東京）會社重役（七一）
尾崎　行雄（三重）著述（七九）
內ヶ崎作三郎（宮城）早大講師
町田　忠治（秋田）黨總裁
太田　正孝（靜岡）著述業（五二）
山本悌二郎（新潟）會社重役（六八）

結局

次回の選挙委員會まで保留と決定、五時過ぎ散會したが、この新選問題も要は新入生の目覺に依つ性質のもので他から動めるのでは面白くないとの意見も濃厚で同案はこゝに事實上葬回されたものと見られてゐる

伊藤主任語る

先日の選挙委員總會では時間がなくて充分な協議も出來ず結局次回の委員會まで保留されることになつた、今年の新入生から學園の模範になつてもらひたいとの良い動機から出發した提案を歪曲して考へる向もあり、これ

榛原製

早大出身政友七十名

林首相が第七十議會の最終日に當つて政民兩黨の重要法案審議の遅滯を遺憾とし議會の反省を促すべく衆議院の解散を奏請し茲に興奮を有せざる政府の下に異例の解散は斷行され國來政戰二旬、夜來の春雨に洗はれて若葉潤える三日朝戰塵既に收まり國民總意の審判は「反政府軍完勝」を傳へ混戰の坩堝に中原の座を奪つた八百廿余名の候補者の中から學園出身八十名の新代議士が新しく築き付けられた政界の一分野に躍り出た、新代議士諸氏の黨派別は民政が矢張り第一位を占めて三十七名、政友十五名、中立六名、社大六名、東方會二名、國民同盟二名、昭和會二名、皇道會一名、關係者八名で出揃つた新代議士四百六十六名の五分の一を占める進出振りこゝにも年一年と躍進を遂げる「伸び行く早稲田」の力強い姿が如實に描き出されて行く

【民政黨】

多田　清（千葉）通信社々長（44大政）
松永　東（埼玉）辯護士（昭9推薦）
清水留三郎（群馬）著述業（35邦法）
木檜三四郎（群馬）農　業（26邦政）
森下國雄（栃木）著述業（6專政）
豐田　博（福島）著述業（45大商）
栗山　豐吉（茨城）著述業（6大商）
比佐　昌平（福島）著述業（41大政）
信太儀右衛門（秋田）會社重役（4推薦）
永井柳太郎（石川）黨幹事長（38大政）
樫井兵五郎（石川）日本タイプ社長（44專政）
喜多壯一郎（石川）早大教授（6英法）
小山　松壽（愛知）名古屋新聞社長（28邦法）
紫安新九郎（大阪）會社重役（33邦政）
田中　万逸（大阪）著述業（大正5推薦）
中村三之丞（京都）無　職（7大政）
齋藤　隆夫（兵庫）辯護士（27邦行）
堤　康次郎（滋賀）無職（27邦行2大政）
坂東幸太郎（北海道）農業（44大政）
宮瀬佛勇（長野）會社重役（44大政）
松井　鄂郎（新潟）辯護士（27邦法）
北　聆吉（新潟）著述業（41大文）
佐藤　興一（新潟）農　業（42推薦）
增田　義一（新潟）實業日本社長（26邦政）
寺島權藏（富山）會社員（2大政）
卯尾田穀太郎（富山）重役（7大商）
松村　謙三（富山）農業（39大政）
小山谷藏（和歌山）會社員（31英政）
片岡　恒一（三重）無職（9大政）
木原七郎（廣島）會社重役（39專政）
牧山　耕藏（長崎）長崎日日社長（39大政）
三好榮次郎（鳥取）山陰日日社長（39專政）
山道襄一（廣島）元廣道政務次官
西村丹次郎（岡山）無職（23邦政）
清水德太郎（山形）無職（5推薦）
藤田岩水（廣島）辯護士（31邦行）

【政友會】

安藤　正純（東京）元文部政務次官（4推薦）
河野一郎（神奈川）重役（12經濟）
橋川　重次（埼玉）農業（6大文）
小山田義孝（秋田）農業（8專政）
津島　文治（青森）農業（8專政）
四宮　貞吉（岐阜）農業（21邦政）
松木　弘（新潟）辯護士（34推薦）
高橋　圓三（島根）東京毎日主筆（9大政）
木本主一郎（和歌山）會社重役（28邦政）
西岡竹次郎（長崎）長崎民友社長（5專政）
佐保　畢雄（長崎）農業（31專政）
田中　亮一（佐賀）農業（4大政）
紹田　直道（鳥取）日南協會理事（4大政）
助川啓四郎（福島）農業（39專政）
岩元榮次郎（鹿兒島）農業（41專政）

【東方會】

淺野奈邦（北海道）著述業
中野正剛（福岡）著述業（42大政）

【中　立】

鳳見　章（茨城）著述業（42大政）
田淵豐吉（岡山二）無職（41大政）
原中　凡夫（福岡）無職（9專政）
曾木　重貴（宮崎）農業（45大商）
田川大吉郎（東京）元東京市助役（23邦政）
中原謙司（長野）南信電氣重役（昭8推薦）

【社　大】

浅沼稻次郎（東京）著述業（12經濟）
阿部茂夫（東京四）教師（8專政）
中村高一（東京）辯護士（12英法）
三宅正一（新潟）著述業（12大政）
田原春次（福岡）著述業（11專政）
川俣清音（秋田）著述業（12專法）

【皇道會】

平野　力三（山梨×11專政）

【國　同】

佐藤　啓（山形）農業（23邦行）
伊豆蔵人（熊本）熊本新聞社員（4專政）

【昭和會】

森　肇（長崎）農業
中野貫吉（福島）鑛山業（34邦法）
春名　成章（群馬）無職（39大政）

【學園關係者】

安部　磯雄（東京）著述業（五早大教授七三）
場山　一郎（東京）著述業（五五）
頼母木桂吉（東京）會社重役（七一）
尾崎　行雄（三重）著述（七九）
内ヶ崎作三郎（宮城）早大講師
町田　忠治（秋田）黨總裁
太田　正孝（群岡）著述業（五二）
山本悌二郎（新潟）會社重役（六八）

結局　次回の選挙委員會まで保留と決定、五時過ぎ散會したがこの新聖問題も要は新入生の目覺に俟つ性質のもので他から勧めるのでは面白くないとの意見も濃厚で同案はこゝに事實上葬られたものと見られてゐる

伊藤主任語る　先日の選挙委員總會では時間がなくて充分な協議も出來ず結局次回の委員會まで保留されることになつた、今年の新入生から學園の模範になつてもらひたいとの良い動機から出發した提案を歪曲して考へる向もありこれ

會雅集

新聞部ノ寄ヨリ掲載

原製

巨人大隈の蔭の秘話

偉人を生んだ此母性愛！

伸び行く學園早稲田を繞り憲政の危機を僅かにつなぎとめ得た政局の動向に注視する時我等は今更の如く思ひを大隈老侯の上にはせざるを得ないがこゝに奇しくも侯生誕百年祭の年に當り侯大成の素質の大半を育んだと言はれ、覇業の基高い侯母堂三井子刀目の涙ぐましくも父愛に富める母性愛の發露ともいふべき德行が一學徒の眞摯なる研究途上に於て取上げられ當事者、大隈家、學園關係者は勿論この話を聞く者をしていたく感激せしめ各方面に大なるセンセーションを捲き起してゐる

研究途上の收穫

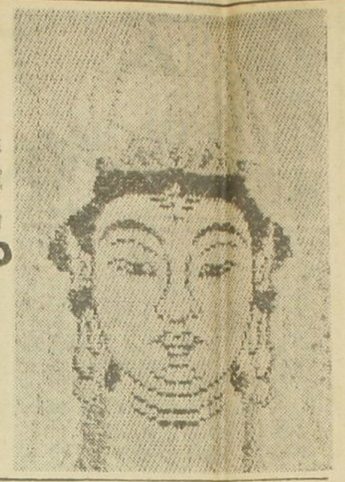
蓮糸織の觀音像

感激の大賀博士語る

時に幾父が逝去され其後老侯は專ら三井子刀目の手に依つて教育せられたのであるが刀目は家庭教育に深く留意し、規律節制に重きを置いたがその自然に伸びゆく性質は抑へなかつたとの事である

刀目は老後は專ら信仰、慈善生活を送られ東京の社寺は全部參詣され「大隈家の御隠居樣」として東京の社寺の檀信は殆んど刀目を知つてゐたとまで言はれてゐる

刀目が明治三十八年一月一日、九十歳の高齢で逝去された時は特に兩陛下より勅使を遣はされ御菓子料を賜はつたといふ事である



學徒とは即ち東京帝大農學部教授農博、大賀一郎氏の事で氏は這の研究に關しては世界的權威であり蓮が開花する際に音を發するか否かに就いて曾て學界、風流界に大問題を提供した個本尊としても有名であるが、今回の事は氏が蓮糸では織物が出來ないといふ學界の通說を反撥する考證として研究を始めその途上に於て氏の說を

有力 に裏書するものとして大隈侯母堂の書早觀音像を取り上げたのである、而してこれに就て詳細に研究調査を始めた藏美術品としても極めて貴重なものであり尙又其上にこの觀音像を作成されるに當つての三井子刀目の母性愛に深く打たれ氏としては未發表の事ではあるが大隈侯とも緣りも深いといふ理由で記者の求むるままに幣に本紙に最初の發表を許されたのである。

まるが現在二十四幅だけ判明してゐる、いづれも門外不出の秘寶となつてゐて東京附近では淺草寺、鎌倉八幡宮に奉安されてゐる、尙大賀博士は特に次の點を强調されてゐた

蓮の糸で織ると言ふだけでは世間の人が蓮の糸を集めるのがどんなに骨折りだかといふ事を殆んど知らないので一寸

常人 にはその苦勞が諒解しかねますが大體蓮の莖を集めるだけでも大變なのです、莖を取つて子ふと蓮根が出來ないから伸々莖が手に入らないのです、手に入つたとしても莖を折つて糸を出す時約三寸位しか引けません、又年中採れるものであり、又蓮を取つて來てから三日以内位に糸をとらぬともう糸は出ないのです、一本の織糸に約四千本の蓮糸が必要です現大隈侯夫人光子さんの話ではお祖母さん（三井子刀目）は蓮糸を取る爲めにはそれは〳〵一所懸命で徹夜等もされ目は血走り手の先は血がにじんでゐるのにそれでも休まずロには佛を稱へ乍ら續けられてゐたとの事ですこんな事は到底通常には出來ませんが

刀自 の母性愛ともいふべき熱心、根氣、信仰がなければ不可能です、こうして集められた糸に靈照律師が入佛されて後京都に送られたのです、私は調査して行くにつれて實に刀目の母性愛に感激致しました、尙この事に就いては大隈侯八十五年史に「蓮の曼陀羅」として一寸見えてゐますが年代、幅數等誤つてゐると思ひます、私がこの話をした某女史は大變感激して女學校の修身の教科書に採り入れて見たいと言つてゐました、私はこの事をこれだけの事實がそろつてゐるのだから脚本にでも書けば相當良いものが出來ると思つてゐます」【寫眞は淺草寺秘寶の觀音像の頭部】

信仰の一生

刀自の略歷

三井子刀目は文化三年三月六日に佐賀藩士杉本牧太の二女として生れ十九歳の時に大隈興一左衛門信保に嫁ぎ其後二男二女を上げ信保はその長男である、侯十三歳の時に父を失ひ其後は專ら信仰、慈善生活を送られ東京の社寺は全部參詣され「大隈家の御隠居樣」として東京の社寺の檀信は殆んど刀目を知つてゐたとまで言はれてゐる

刀目が明治三十八年一月一日、九十歳の高齢で逝去された時は特に兩陛下より勅使を遣はされ御菓子料を賜はつたといふ事である

その觀音像は縱一尺、横六寸で掛圖子になつており綾織の地に茶色した蓮糸を以て織出したものでその精巧さは、未曾有のもので恐らく蓮糸のみを以て織られたこれ程のものは今後とも出來ないだらうと大賀氏も

折紙 をつけてゐる、又同圖子の右扉には「蓮義大隈重信母三井子奉安、年七十五歳」左扉には皇后より賜つた御歌二首「いにしへも、かかるためしはありといへど、織やはちすの、いともめづらし」と「くりたむるはちすのいとの一筋に心こめずはいかでなしへむ」の御歌が記されてある、裏には所謂裏書として池原香穎（大邦）が漢文で二百五字記してゐる

刀目は大隈侯四十二歳の厄年を無事に終らしめたいとの願ひを以て

發願 されたので綾子夫人令孃龍子刀目令孃光子さん等も時時手傳ひ明治七年より十年迄四ケ年間に亘り蓮糸を集め京都西陣に送り五代目伊達彌助が手織で織つたもので、これを四十二幅織成せしめ全國の名刹に奉安されたので

王冠に燦然
世界一のダイヤ
莊嚴・戴冠式
絢爛、豪華な御行列

ロンドン五日發
菅垣特派員

英國の國家的社會的榮譽のもとに今度の戴冠式は豪華な幕を揭げるが世界的榮光を谷びて我等の眼前に展開するものは何か、そのもつとも見ものとされるのは五月十二日ウエストミンスター寺院の中で行はれる莊嚴な儀式と其前後にバッキンガム宮殿とウエストミンスター寺院との間を往復する華やかな御行列であらう

この御行列を拜觀する會の百萬とも稱せられるコロネーション・シート（戴冠式拜觀席）の樣數については既々報道した通りで、之こそ英國皇帝と國民との親愛の最高潮を示現する劇的場面であらう、そして伝職きウエストミンスター寺院の奥深き殿堂において行はれる戴冠式は英國の誇る傳統と宗教的儀式との最高位に立つもので記者は當日寺院内三階の一劃に拜觀席を與へられ、畏くも典を拜觀する光榮に浴してゐる

のありさうな話だけ拾つてみよう、兩陛下される御馬車は一七六一年ーチ三世のために造られたで、その製作費は七千五百ポンドかゝつたといふ、車四隅にトライオンといふ半魚の

海神

が波靜かなれと貝を吹き屋根のエインガランド、スコットランドを表徴した人の子供の像が取つけてあるが、アイルランドは前電の通今度の戴冠式をボイコットしてゐる、御行列の道筋の長さはニマイル、御行列の長さは二マイルで一箇所を通過するのに四分の

入絹研究會
取引機構改善へ

……

滅びゆく江戸名物

淺草名題の川魚料理
山谷堀の重箱廢業

さのじ

爲永春水の「梅暦」巻之三第六齣丹次郎がお蝶をつれて、多賀橋の鰻屋へ行き、二階座敷で誂への蒲燒を待つてゐる條に、

『どうも素燒の匂ひが嫌ひだ、これには山谷がいゝの』

『アゝねへ、裏でも廣くつて、二階でないから、煙が來ないでよいヨ』

と云ふ二人の會話がある。此の丹次郎が山谷と云つてるのは、正に重箱をさしたものであり、重箱は其の場所柄、吉原を第一の得意場として春水が「梅暦」を書いた頃が、丁度その全盛時代であつたと云ふことでお蝶の云つてるとほり、庭園もゆつたりと廣くつて、家は平家建で、廣くもあつたから、板前の魚を燒く煙が、客座敷に舞込むの、團扇をバタ〳〵やる音が聞えるのと云ふやうなことは、絶對に無かつたものだ。

尤も、筆者の知つてる明治時代には、表門を入つて右側に、二階建の部分が在りはしたが、其れは二室くらゐなもので、後の建築らしく、普通客座敷としては、餘り使はなかつたらしい。

……

江戸が東京となり、東京人に漸次江戸ッ兒辯が失せゆくと共に、味覺までも打つて變つて、舊式料理は汁が甘いの、水ッぽいのと貶し、バタ臭いのが何よりの珍味と云ほれるやうになつた、明治大正の御時節に、江戸式板前の行き立たう筈なく、昔から有名無名の料理屋、相尋いで廢滅は、寧ろ當然過きるほど當然を餘所事に見て、昔ながらの鮮魚御料理の看板を其の儘に、淺草山谷に依然として、舊態を維持した重箱の酬儀も、大正の震火災に、之れも舊家で著名の八百善と共に、燒出されの悲運は御多分に洩れず。此に於てか、八百善は之れを一轉機として、舊地を捨てゝ築地で再び開業したが、重箱が山谷で元々どほり、復興開業は芽出度も亦奇しき存在と、好古的食通連に喜ばれてゐた處、今茲三月十三日の東朝夕刊紙上、放送室欄に、百六十年程前、鯰のすつぽん煮を考案し、江戸の昔から通人粹人の間に、淺草名題の川魚料理の名を謳はれた、山谷堀の重箱も時代の波に押されて、到頭廢業してしまひました。庖丁のさえで巨萬の富を築いたのも昔の夢、五代目でたうとう持ちこたへきれず、敷寄を凝らした庭の洛石名木も、四散するなど、その解消は食通連を淋しがらせて居ます。そしてせめて名殘りの暖簾だけでもと、店に働いた人が、さゝやかな店を續けるさうです。

……

五代目の今の主人は、筆者未だ會て一面識も無いが、四代目の主人大谷儀兵衛と云つた人には、今から三十四五年前に、三四回も會見したことがあり、其中にも一度は、吉原遊廓に關する多くの古文書を、今度一纒めに手に入れたが、何かの參考にもならうと思ふから、御覽に入れたいと、友人某の處へ案内があつたと云ふので、其の友人に誘はれて、三人づれで行き、終日邪魔をしたのであつた。四代目儀兵衛は斯うした趣味を有し、極めて氣さくな人で、右古文書の事からして、いろ〳〵の話があり、其際同家の歴史に就て尋ねた處、創業以來私で四代目になりますが、妙な事に代々養子相續でしてね、と云ふのが始まりで、先祖は相州大山の麓の上棚と云ふ處の酒造家大谷金七と云ふ者の伴で、名を儀兵衛と云ひ、二十四歳の血氣盛りの時何か非常な紛紜事件に關係した結果友人と三人連れで、江戸へ逃出して來たが、素より全くの裸一貫で、勞働するより外に途が無い處から、先

續こへ〳〵

王冠に筋に燦然
世界一のダイヤ
絢爛、豪華な御行列

ロンドン五日發
荒垣特派員

莊嚴・戴冠式

英國の國家的社會的背景のもとに今度の戴冠式は豪華な幕を掲げるが世界的榮光を浴びて我等の眼前に展開するものは何か、そのもつとも見ものとされるのは五月十二日ウエストミンスター寺院の中で行はれる莊嚴な儀式と其前後にバッキンガム宮殿とウエストミンスター寺院との間を往復する華やかな御行列であらう

この 御行列を拜觀する爲の百萬とも稱せられるコロネーション・シート（戴冠式拜觀席）の棧敷については屢々報道した通りで、之こそ英國皇帝と國民との親愛の最高潮を示現する劇的場面であらう、そして仄暗きウエストミンスター寺院の奥深き殿堂において行はれる戴冠の諸儀式は英國の誇る傳統と宗教的儀式との最高位に立つもので記者は當日寺院内三階の一劃に拜觀席を與へられ、畏くも眼下に盛典を拜觀するの光榮に浴してゐる

當日を前に興味のありさうな話だけ拾つてみよう、兩陛下の召される御馬車は一七六一年チョーチ三世のために造られたもので、その製作費は七千五百廿八ポンドかゝつたといふ、車體の四隅にトライオンといふ半人半魚の

海神 が波靜かなれと法螺貝を吹き屋根の天蓋にイングランド、スコットランド、アイルランドを表徵した三人の子供の像が取つけてあるが、アイルランドは前電の通り今度の戴冠式をボイコットしてゐる、御行列の道筋の長さは六マイル、御行列の長さは二マイルで一箇所を通過するのに四十五分かゝるといふ、この悠長な御行列に加はる馬の數は千二百頭、沿道警戒の警官二萬五千人といはれてゐる

ウエストミンスター寺院の中には當日全世界から集まつた八萬の人人が呑み込まれる、この日皇帝の御いでたちは貂の毛皮で緣取られた紫の御袍を召されるが、戴冠式終了後に御行列の時冠られる王冠（クラウン・オブ・ステート）には二千七百八十三個のダイヤモンドと二百七十七個の

眞珠 が鏤められ御右手に翳される十字章笏（セプター）には世界一のダイヤモンド「グレート・スター・オブ・アフリカ」といはれる五百十六カラット半の拳大の大ダイヤが輝いてゐる

皇后陛下の寶冠はヴイクトリア女皇以來のものでなく今度初めての例として新たに造られプラチナ台に數多のダイヤを鏤め中にもコー・イ・ヌーア（註、一八四九年ヴイクトリア女皇に獻上されて以來英皇室御所藏となつたインド產の有名なダイヤ）といふ大ダイヤが一際鋭く輝く由來有名な寶石は戰爭虐殺等を伴ふのを常とするがこれらの寶石もその燦然たる

光輝 は幾多の罪惡を招きこれがため王位、生命を失つた君主幾何なるを知らず、歴史を血塗つた末にヴイクトリア女皇に獻上されたものだと記錄されてゐる、とにかく兩陛下のダイヤを中心に世界中の寶石は全部ウエストミンスター寺院の中に當日集つて了ふといはれてゐる

戴冠式に用ひられる冠はクラウン・オブ・ステートとは異りセント・エドワーズ・クラウンといはれるもので、これはエドワード懺悔王によつて初めて用ひられたのでこの名があるがクロムウエル革命の時破壞せられチャールス二世の時新造したのが今日に傳はり約八百九十年前のものだ、戴冠式に用ひられる椅子は「キング・エドワードの椅子」と稱され樫の木で造られ六百年以上の古きもので歴代の國王はこゝに坐して戴冠の式を擧げた、そしてその座席の下には運命の石と呼ばれる石がをさめてある、これはアイルランド、スコットランドの國王が即位の時の玉座だつたのをエドワード一世が攻略して持ち歸つたもので紀元前七百年ヤコブがこの石を枕にして所謂ヤコブの夢を見たといふ傳說の石で王者たる者に何物かを考へさせる石であるらしい

又大僧正が皇后の御右手の第四指に嵌める指環は「セント・エドワードの指環」といはれヴイクトリア女皇戴冠の時係官が間違へて小指に合せて作つたのを大僧正が親指から數へて第四指に嵌めるべきものでこの先例は變へられぬと主張して無理やりに無名指にはめて了つた、女皇は痛みに堪へかねて御顏をしかめられたので御側の僧正が見かねて水と石鹼とを式場に取り寄せ漸く拔きとつたといふ挿話があり、エドワード七世の時第四指の定義が出來た位である

これらの豪華な道具だてで行はれる戴冠式の立役者はカンタベリー大僧正だが戴冠式長官として準備萬端儀式の指揮者は

貴族 の筆頭ノーフオーク侯で十七世紀以來世襲になつてをりアール・マーシャルの資格により二十ポンドの年俸だが實て何代か前のノーフオーク侯が式の順序を間違へ皇帝に叱られた時「今度のは御稽古でこの次の戴冠式には間違ひなくやります」と答へた逸話が傳はつてゐる

寶眞の上は御行列に召される王冠、下は王笏で右側が世界一のダイヤを飾る十字章笏

整形外科
下谷區池の端茅町 電話下谷五三七五番
醫學博士 金井良太郎

滅びゆく江戸名物

淺草名題の川魚料理 山谷堀の重箱廢業

さのじ

爲永春水の「梅暦」卷之三第六齣丹次郎がお蝶をつれて、多賀樞の鰻屋へ行き、二階座敷で誂への蒲燒を待つてゐる條に、

『どうも素燒の匂ひが嫌ひだ、これには山谷がいゝの』

『アゝねへ、裏でも廣くつて、二〜やる音が聞えるのと云ふやうなことは、絶對に無かつたものだ。

尤も、筆者の知つてる明治時代には、表門を入つて右側に、二階建の部分が在りはしたが、其れは二室くらゐなもので、後の建築らしく、普通客座敷としては、餘り使はなかつの看板を其の儘に、淺草山谷に依然として、舊態を維持した重箱の鮒儀も、大正の震火災に、之れも舊家で著名の八百善と共に、燒出されの悲運は御多分に洩れず。此に於てか、八百善は之れを一轉機として、舊地を捨てゝ築地で再び開業したが、重箱が山谷で元々どほり、復興開業は芽出度も亦奇しき存在と、好古的食通連に喜ばれてゐた處、今茲三月十三日の東朝夕刊紙上、放送室欄に、百六十年程前、鯰のすつぽん煮を考案し、江戸の昔から通人粋人の間に、淺草名題の川魚料理の名を謳はれた、山谷堀の重箱も時代の

五代目の今の主人は、筆者未だ曾て一面識も無いが、四代目の主人大谷儀兵衛と云つた人には、今から三十四五年前に、三四回も會見したことがあり、其中にも一度は、吉原遊廓に關する多くの古文書を、今度一纒めに手に入れたが、何かの參考にもならうと思ふから、御覽に入れたいと、友人某の處へ案内があつたと云ふので、其の友人に誘はれて、三人づれで行き、終日邪魔をしたのであつた。四代目儀兵衛は斯うした趣味を有し、極めて氣さくな人で、右古文書の事からして、いろ〳〵の話

づ勞働仕事に取り付きはしたもの丶其れが大變な勞働でしたさうでと、それから更に進んで、可なり委しい話があつた。併し何分にも三昔以前の事なので、今は記憶も朧げだが、幸ひ其節備忘錄に、概略を書留めて置いたから、之れを爰に記すこと丶した。

……

初代儀兵衞が江戸に出て來た頃、吉原の土手下は、髮洗橋附近に紙漉屋があつたさうで、儀兵衞は其の紙漉場の手間取り人足に雇はれて、殆ど毎日のやうに、漉返し紙の荷物を擔いで、山谷から品川まで運搬してゐた。その荷物の一荷の駄賃は、六十四文と云ふ定めであつたが、儀兵衞は二荷分を苦も無く一度に擔いで百文の駄賃を取つたと云ふ事だから餘程ガッチリした健康體で、力量も相當なものであつたと見える。

其の頃千住の鮒屋に、主人の名を新兵衞と云ふので、通稱を鮒新と呼ばれ、江戸雀燒鮒屋の元祖と云はれて、川魚商を手廣くする商店があり偶々儀兵衞は其の鮒新方に若い者が入用と聽き、己れは魚屋には少しの經驗も無いが、重い荷擔ぎなら勤まるから、先づ水汲男として使つてくれまいかと申込み、幸ひに望みが叶つて、昨日の荷擔ぎ人足一變して、今日は鮒屋の若い衆となり、爾來陰陽なく忠實しく立働き、追々と商賣のコツも呑込み、天性器用であつたと見えて、庖丁加減も料理の煮燒きも中々上手な處から、大に主人に眼をかけられて、遂に鮒屋の暖簾を分けて貰ひ、鮒儀と名乘つて、一本立ちの鮒商となり、山谷堀の通りに開店したのは、寛政六七年頃であつたが、その借家の店賃は、一ヶ月僅か二百であつたと云ふ事だから、店と云つても、甚だ小ぼけなものであつたらうこと、云ふまでもない。

……

頃は所謂德川氏の爛熟期で、世は一般に太平の夢に浮かれて、吉原不夜城の全盛時代。儀兵衞が山谷堀に店を開いたのは、先づ吉原に注目したからで、彼は贅澤なる江戸ッ兒の味覺を滿足せしむ可く、川魚料理に多大の注意を拂ひ、殊に普通甘露煮とも稱すべき鯰料理に、泥龜煮と云ふ名稱をつけて賣出し、吉原方面の宣傳に努力した處から、其れが忽ち評判となり、遊廓内は云ふに及ばず其他町家方面にも廣く知られて、晝夜眼を廻はす位ゐの商ひ繁昌に、儀兵衞の身上は追々と太るばかり、隨つて世間の信用も厚くなり、其處の地主であつた通油町の鐵屋彦助と云ふ人から、差配を頼まれる程になつた。處でその地主の鐵屋は鮒儀とは反對に、少し家事向が左り前になりかけたと云ふ譯から、地面を手離す事になつたが、同じ手離すなら、差配の鮒儀に讓りたいと云ふ希望であり、乃で儀兵衞は大に喜んで地所を買取り、續いて相當のお客を迎ふ可く、店の普請をしたと云ふことである。其の時初代の建築した六疊の座敷は、何時頃か取毀して、其の材木は保存してあつたか、柱に寛政十一年九月と云ふ銘記のあるのを見ると創業以來僅か四五年を經たばかりであるから、その營業發展の速かさを之れによつて見ても推知することが出來る。四代目は、初代の記念として、右六疊の座敷を永く保存すべく是非組立てると云つてゐたから、其後多分復舊したであらうが、大正の震火災には如何であつたか、甚だ心元なく思はれる。

……

二代目儀兵衞は、淺草並木の魚屋の伜で、夫婦養子だが、其の妻女が紀州家の老職正井宮門と云ふ人の落胤だと云ふ事で、其の家老の緣故から、二代目は紀州家は勿論、他の大名方からも、川魚の御用を承るやうになつたさうである。

三代目儀兵衞は、千葉縣流山在、三輪の山の内藤一郎兵衞の次男であり、四代目は其の甥に當るのであるさうだ。

四代目の曰く、鮒儀の家は斯うして代々養子で、私は伯父の養子となりましたが、お蔭で私の代になりましても、貴顯方の御愛顧を受けまして、御一新後偉いお方が、お忍びによく入らしつたのですが、最初はお名前が知れないので、隨分困りました。西鄕南洲さんも、折り〳〵お出でになりましたが、或時騎馬で入ら

式庭載・嚴粧
王冠
世

莊嚴・戴冠式

王冠に燦然 世界一のダイヤ

絢爛、豪華な御行列

ロンドン五日發

荒垣特派員

英國の國家的社會的背景のもとに今度の戴冠式は豪華な幕を揭げるが世界的榮光を浴びて我等の眼前に展開するものは何か、そのもつとも見ものとされるのは五月十二日ウエストミンスター寺院の中で行はれる厳粛な儀式と其前後にバッキンガム宮殿とウエストミンスター寺院との間を往復する華やかな御行列であらう

この御行列を拜觀する人の百萬とも稱せられるコロネーション・シート（戴冠式拜觀席）の様態については既々報道した通りで、之こそ英國と國民との親愛の最高潮を示現する劇的場面であらう、そして仄暗きウエストミンスター寺院の奥深き殿堂において行はれる戴冠式は英國の誇る傳統と宗教的儀式との最高位に立つもので記者は當日寺院内三階の一劃に拜觀席を與へられ、畏くも眼下に盛典を拜觀するの光榮に浴してゐる

當日を前に興味のありさうな話だけ拾つてみよう、兩陛下のされる御馬車は一七六一年チーチ三世のために造られたもので、その製作費は七千五百ポンドかゝつたといふ、車體四隅にトライオンといふ半人魚の

海神

が波靜かなれと法貝を吹き屋根の天にイングランド、スコットランド、アイルランドを表徴した人の子供の像が取つけてあるが、アイルランドは前電の通り今度の戴冠式をボイコットしてゐる、御行列の道筋の長さは二マイル、御行列の長さは二マイルで一箇所を通過するのに四

人絹研究會

取引機構改善へ

東京、大阪、福井三人絹織合同取引所聯合會では日本人絹織物の品質向上と輸出の振興に資するため人絹研究會を設置することゝなつたが、同會は業務規定成立次第直ちに發足する模様である

海の怪

つゞ鯛仕掛に取り付きそれにおかゝる愛嬌顔でしたが其れから其の頭に進んで居るのを見て、「件し何分の事なので、今は記憶に幽幽感謝の幸ひなら、それを愛嬌にして置いたから」

……

初代儀兵衛が江戸に出て吉原の土手下に、繁盛の遊場の手間取り人足に國屋がうつたりで、通りがかりに、江戸の傳統の元で、川筋の傳統

法窓閑話

書は小説家・夜は泥棒

明治のジキル博士！ 柵山人

尾佐竹猛

「窃盗犯人堀本貞一、重禁錮に處せらる」と云ふ記事が明治廿五年の諸新聞に掲げられると世人はアット驚いたのである。

といふのは、當時文壇に覇を稱へた硯友社一派の柵山人の本名がこの堀本であつたからである。他の文章を剽んだとか、ひとの趣向を無斷借用したかといふ風の泥棒なら、文壇では敢て珍らしいことではないが――と云ふと甚だ失禮千萬な言であるがこれは現今の文壇を指すのではなく昔の話であるから勘辨を願ひたい――いやしくも文壇一方で名のある小説家が、眞の窃盗犯人、それも一度や二度でなく、他人の邸宅へ忍び入つて金品を盗んだと云ふのであるから、いくら神經過鈍な人間でも、こりや驚かずには居られない。

これは珍種とばかりに都下の新聞は一齊に書き立てた。當時のインテリは寄ると觸はるとこの話で持ち切つた。なかにも憤慨もし、慚嘆をしたのは文士連中であつた。我等の名譽を汚すものだと泣いたものさへあつたといふ程に、その頃の文壇は純眞であつたのだ。

◇

この間にあつて冷然として、世評を看過して居つたのは、硯友社とは別に文壇の一方に割據して居た森鷗外であつた。駈けつけた新聞記者が御感想はと切り出すと、フンと鼻であしらつて曰く「小説家が、泥棒をしたのではないよ」記者はあつけにとられ「ヘエー」鷗外は曰く「泥棒が小説を書いて居つたのだよ」

この話はこれきりであり、鷗外の挿話として殘つて居るだけであるが世の中には、この種の論鋒は少くはない。

幕末の志士、日柳燕石は博奕が好きであつた。マア一面からいへば博徒であつた。しかも一面は勤王の志士として著聞し、その詩文なども秀でたものであつた。そこで或人が忠告して、いやしくも天下の志士たり學者たるものが、博奕を爲すとは、德を傷つくること大なるものだといつたが、燕石の答は曰く「學者が博奕を好むのは良くないかも知れぬが博徒が學を好み、慷慨の志ありとしたなら、褒めて貰つてもよいだらう」

これを明治時代に飜譯したやうな話がある。女學生が淫賣した事件があつた。そんな事はたいした珍しいことでもないが、當時は大問題であつたが本人にして見れば可哀想な事情がある。インテリ全盛時代で、女子が女學校を卒業するといふことは非常な誇りであつた。それは近くまで男性があらゆる犠牲を拂つて、大學卒業を目ざしたと同じ眞剣さであつた。然るにこの女性は氣の毒にも中途に學資がつきて、詮なく最後のものまで賣るに至つたのである。冷酷な世間は遠慮なく攻撃したのであつた。或者は辯護して曰く、女學生が淫賣しては惡いかも知れぬが、淫賣婦が女學校へ通つたとしたならば立志傳中のものではないか、といつた。この辯護説を吐いたものは誰であつたか忘れたが、僕並に、僕の友人でないこと丈は保證する。

こんな風に三つの話は本來なんの聯絡もないが、かう並べて見ると、そこにはなんらかの理窟の一貫したものがあるやうな氣がする。が、これが所謂、論理遊戯なるものの最たるものであらう。

柵山人のことは、最早世間からは忘れられて居つたが、近頃當代の奇人外骨老が、「柵山人は文藝上の天才家であり堀本貞一は窃盗犯者としての辣腕家である」とて「柵山人小説全集」を出版する計畫を樹て資料を募集して居つたが、柵山人の就縛の時は伊藤痴遊の家に厄介になつてゐたさうで痴遊の説では柵山人は今なほ生存して社會事業家となつて居るさうである。明治時代の一奇聞も、外骨、痴遊兩雄の筆と舌とにかゝつては更に生彩を增すことだらう。

で、この柵山人の犯行は判決書に依ると次のやうなものである。

判決書

東京市麻布區宮下町廿二
士族義明長男無職
堀本貞一
一月生ノ二十一年

右窃盗被告事件ノ公訴遂審理處被告貞一ハ

第一、明治廿五年八月卅一日午前一時頃麻布區新網町二丁目十五番地林田小右衞門方ノ塀ヲ乘越ヘ雪隱ノ窓ヨリ座敷ニ忍入リ柱ニ掛ケアリシ金側懐中時計壹個及ヒ戸棚ヲ明ケ用簞笥ノ中ヨリ金六十一圓五十錢外四點ヲ窃取シ

第二、同年十月十四日午前一時頃麻布區材木町四十八番地堀基方小門ノ開キ居ル處ヨリ忍ヒ入リ玄關脇ノ戸ヲ明ケ庭ニ入リ家内ノ者寢靜ルヲ窺ヒ同所ニアリシ梯子ヲ雨戸ニ掛ケ欄間ノ障子ヲ外シ座敷ニ忍ヒ入リ簞笥ノ上ニアリシ銀製箱入金無垢實印壹個書類數通在中ノ手提カバン壹個ヲ窃取シタルモノト判定ス

以上ノ事實ハ被告カ當法廷ノ自白及其調書巡査ノ報告書及被害者ノ盗難訴同追訴證明書訂正願書品清算書等ニ徵シ其證憑明白ナリトス

之ヲ法律ニ照スニ被告カ所爲ハ何レモ刑法第三百六十八條第三百六十七條第三百七十六條ニ該當スルモ二罪俱發ニ付同第百條ニ則リ處犯情狀ハ重キ第一ノ所爲ニ對シ處斷スヘキ者トス因テ被告堀本貞一ヲ重禁錮壹年ニ處シ監視六月ニ付ス

但シ堀基ヘ假下ノ手提カバン壹個外ニ書類十八點ハ刑法第四十八條ニ從ヒ其儘同人ニ還付ス

明治廿五年十二月廿四日於東京地方裁判所刑事第四部公廷檢事仲小路廉立會第一審ノ判決ヲ言渡ス

裁判長判事　湯淺　義則
陪席判事　床次　正精
陪席判事　頴賀　鐸
裁判所書記　柴　茂三郎

この檢事は、後に農商務大臣から樞密顧問になつた官僚の利け者であり、陪席判事の床次は、床次竹二郎氏の先代である。油繪を描き、議院にあつた憲法發布式の畫は此人の筆である。

柵山人の後身については嚴谷小波の「私の今昔物語」に――

「今は昔、私が硯友社に入つた當座私の所へ柵山人と云ふ男が出入して居た。姓は堀本と云つて麻布の住人筆も口も相應に利く才人であつたが人格があまり面白くなかつたので、本人の希望ではあつたが、硯友社には遂に入れなかつた。所がその後、何か氣まづい事があつて、バツタリ足を斷つてしまひ、それから久しく消息を知らなかつたが、その後ある筋から聞くと、伊藤痴遊の門人になつて、その家に居る間に、また何か良からぬ事を出かして、世間に顔も出せなくなつたとか云ふ事だ。所がふしぎではないか、此間江見水蔭君に聞くと、此頃時々放送に出て、童話や趣味講演をやる某といふ人は、何ぞ知らん當年の柵山人その人だといふ。某と云へば、留岡氏の家庭學校の講師で、修養講話にも出てまはる筈の人だ。さては先生、懺悔の生涯に入つて、專ら罪滅しをやつて居るのであらうが、新聞で見た肖像に當年の俤が殘つて居るのを見て、あれから四十年近くも經つたかと思ふと、全く隔世の感がある」

小波と柵山人との關係に付いてはその後に出た、外骨老の「柵山人小説集」に依ると、明治廿三年四月發行の「日本の文華」に出た「櫂の雪」に連山人(小波)の校閲となつてゐるまた柵山人が、伊藤痴遊方に厄介になつて居り捕縛される迄の事情は「伊藤痴遊全集」第十三卷「快談逸話」の中に出て居る。

明治廿三年四月四日午後十一時卅分頃麻布區鳥居坂の東洋英和女學校へ强盗が入り校長米國人、イ・ゼ・スパンサー・ラージ夫人及夫チ・エ・ラージを殺傷した例のラージ殺し事件が發生したが、犯人が容易に捕へられず、一時、柵山人が入質した指輪がラージ氏所有のものに似て居ると云ふので、その嫌疑を受け柵山人の名は益々有名となつたが、これは十二年後の明治卅五年十二月やつと眞犯人を捕へることが出來た。

ほ生存した証拠事柔家となつて居るやうである。明治時代の一名閥を一名閥の外骨、福澤諭吉の盛名を奪ったとは、どうしても生涯の一大不幸である。

第二、同年十月十四日午前十時布哇太郎氏の居住する小門の開き扉の前に、一人の婦人が立つてゐるのを見た。

第三、同年十月十八日午前十時布哇太郎氏の居住する小門の開き扉の前に、一人の婦人が立つてゐるのを見た。

右發表致告事件ノ公訴案事理明白ナルヲ以テ刑法第一百一条ノ二ノ第一ノ、明治廿五年八月廿一日東京地方裁判所ニ於テ言渡シタル判決ノ通リ被告人ヲ懲役二年ノ刑ニ處シ、其ノ未決拘留ノ日數ハ本刑ニ算入シ、訴訟費用ハ被告人ノ負担トス

一時間程田小右衛門方ノ廊下ニ腰掛ケ、雪隱ノ窓ノ座敷ニ腰掛ケ、雪隱ノ窓ノ座敷ニ腰掛ケ、雪隱ノ窓ノ座敷

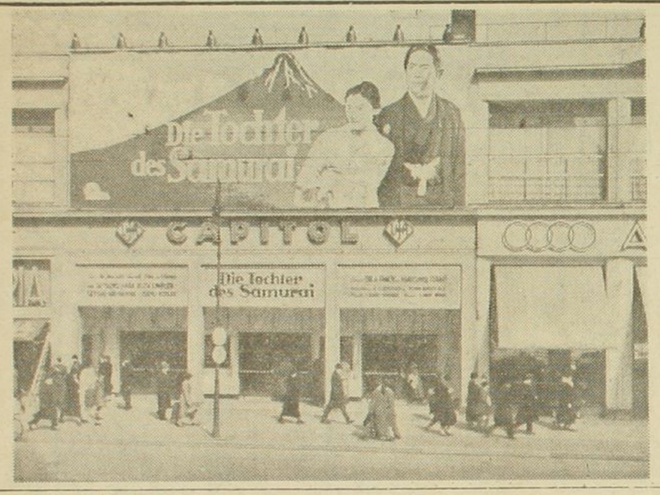
ゝ久保愛藏自ら綴殺となつて居る樹十一年即ち、一八七八年一月一日の出獄に当つて、自殺同様の死を遂げたのである。（五月）

品數は四萬五千三百餘点、一九〇〇年再び巴里で萬國博覽會が開かれて百二十萬圓を費して愛國博覽會と題する大規模を企てた。この時分は明治廿六年で、日本は第一回の出品をなしたのである。

△

一九〇〇年

白木カピトル座（サムライの娘）



何に役立たしめるかを示すものである。更に兩國民に、外的將道の共通性と未來の希望が奈邊にあるかを示し、それに依つて兩國の運命の同一性を語つてゐる。

四人の主役はガッチリ組んでゐる。フアンクの特殊な認識が純粹な文化映畫を非常に刺戟的なカメラの移動に依つて軟かにしてゐる。又カメラのリヒアルト・アングスト及びワルテル・リムルの功績も大きい。單純な物語なので言葉もリアルであり

七十年代以來日本は默化された。私は日本發展のこの間の歴史を三本の映畫によつて示さうとした。これは東京でも賛成を得た。そしてこれを完成する機會を別に得るだらう。

ところで日本人と機械といふ點について、私の仕事に關係してゐるところを觀察すると、二つの事實から困難が生れてゐる。第一に、多角的な機械に對する精通の不充分、第二に他人に本當の事を言ふのが禁ぜられてゐるといふ禮儀から。從つて手づから示して誤りを訂正するより他なかつた。又言語の場合においても困難が伴つた。ドイツ語を日本語に飜譯しても、理解されなかつたりした。一例を擧げると、一つの語に、我々が具體的な事實を意味させてゐるのに日本人はこれに抽象的なものを與へて理解する。

こゝには對立的な理解に屈折つてゐる二つの世界があるといつてよい。俳優との場合だと一層多かつた。日本ではアメリカ映畫が盛んに上映されてゐるが、監督たる人々はこの西歐の手法を生活が異るので、模倣出來ない。俳優の場合は、我々の要求を充たすものはたつた一人に過ぎない。主役女優の一人である原節子は私が見出したのだが、全く無名であつた。有

ルニエのハープを聽く

平田光雨

音のユアンとヴオリームの調において器樂王座をめるとはれてゐるハーには、またその性能に伴ふ技巧デフイキュルテーの存在を否むけにはゆかない。例へば七つタルの連行と指の特殊な關聯運である。その修練だけでも容易ない。

▼佛蘭西のハーピスト、ソランユ・ルニエの過日の演奏はこの難な樂器を驅使して獨自の美しを表現するに十分で有つた。

▼ソランジュ・ルニエは天津駐の佛蘭西副領事のマダムだが、に若い頃から叔母にあたる世界の女流ハーピストといはれるアリエット・ルニエの薫陶を受けとして重きをなして居たので、々も巴里で屢々その演奏に接し知つて居た。巴里では深い注意持つて聴き與へられなかつたが、うして日本で聽いて見ると驚

てゐる。嫌笑や哄笑の代りに、的に優しさがある。

赤外フキルムの特殊な表現藉りて、銀香の若葉を明るく左程、私たちはこのトーンか

ヘレン・ケラーの恩師サリヴァン女史

中桐確太郎

1

本紙前號にも掲げてある通り、この天長節の午後、大隈講堂に於て講演せらるゝことになつてをるヘレン・ケラー女史は、マアク・トウエインが、ナポレオンと並べて、第十九世紀の生める二個の偉人とたゝへたる程の存在である。生れて十九ヶ月病によりて盲聾唖となつたが、恩師サリヴアン女史の獻身的教育によりて靈的に甦り、十七歳の時ケンブリッヂ女學校に入り、廿一歳ハーヴード大學の女學部であるランドクリッフ大學に入學、廿五歳優等の成績を以て卒業、英、佛、獨、拉丁、希臘の五ヶ國語に通じ幾多の學位を有し、主として盲聾唖者のために獻身的に盡力しつゝある。實に廿世紀の奇蹟と稱すべきであることは周知の事實である著述も少からず、大隈講堂における演題「私の住む世界」はその著書の一つの名であるが、ケラー女史はこの書を或人に贈るに當つて書きそへて『人は「私の世界」を陰欝な、物寂しい世界といひます併し私にとりては、それは溫き樂き世界でありまして、此暗黑の中に、晝には見ることのできぬいろ〳〵の星が輝いてをります』と申してをる。此度の講演によりてこの靈なる星の光りに接することができるであらうことを祈らざるを得ぬのである。

ヘレン・ケラー女史は眞に廿世紀の驚異であるが、盲聾唖の三重苦岩に閉されたる寶石の如きものであつた。この堅殼を打破し、この頑鑛を琢磨して、天賦の美質を發揮せしめたアンニー・マンスフイルド、サリヴアン女史（メーシー夫人）こそはそれにも劣らざる、或意味にてはそれにも優りたる偉大なる人格といはねばなるまいと思ふ。私はサリヴアン女史に最も深き興味を感ずるものである。

サリヴアン女史は自分を言ひ現はすことを好まなかつた。一切をヘレン・ケラーに献げ、ヘレン・ケラーの蔭にかくれ、ヘレン・ケラーを通しての み自分を表すことを以てこよなき樂みとしてをつたのである。人ありてその經歷を問へば、只ヘレンを指すのみである。幾多の大學から學位を贈呈せられた時でも堅く辭退し、テンブル大學における如き余儀なき場合でも「私の戴冠式に於ても（ヘレンは女王である」と擧ろ誇りかに語つた程で、幼少の時の事などはケラーにさへも詳しく語らなかつたといふことである併しながら追々老境に進み、自分が語らなければ、どのやうな說傳を遺すかも知れぬことを痛感し、十數年來の知友であるネラ・ブラッデイ女史に托してものせしめたものが唯一の傳記であると聞いてをる。それは七年間の苦心を重ねて一九三三年に出來上つたものであるが、この書にはサリヴアン女史の幼時を次の如く描いてある。

2

一八四七年の大飢饉の波は數多の愛蘭人を押流して米國各地に漂着せしめた。サリヴアン女史は一八六六年四月十四日を以てマッサチュセットのフイーディング・ヒルと云ふ所に生れた。受洗名はヨアンナであつたが、常にアンニーと呼ばれた。母は佛國人を思はせるやうなものやさしく常ににこ〳〵してをる女であつたが、父はのんだくれの日傭人夫であつたから、家庭の教養など滿足であらう筈もなくアンニーもひねくれた我儘者となつて育ち、思ひ切つた亂暴さへはたらいた。或冬の午後、近所の人がその子供に兎の毛のやうな純白の靴下や手袋を着せて訪ねて來た。アンニーはそれをひどく欲しがつたのでその近所の人は深紅のものを購つて來て與へた。母は悅んで「ネーとても美しいじやないか」と申したるに、アンニーは「チットも美しくない。こんなもの要らないや」と叫び、腹立たしげに、ひつつかんで爐に投げ入れて了つた。その近所の人は呆れて「マアなんて恐しい兒だろう」と舌をまいたといふことである。

やさしい母親は暖爐で怪我した事や、產後の疲勞などがつのつて、間もなく彼の世の人となつた。弟のジミーや、妹のメリーは咽び泣きしてをつた時も、アンニーは泣きもせず、不思議さうにその光景を眺めてをつたといふことである。葬式の費用とてもなく、村人の情でやうやく野邊の送りを淸ましたる位であつて、父は親類のもてあましものであり、遂に家も分散となつて了つた。妹のメリーは愛くるしい兒であつたので、叔母の家に引き取られたが、ジミーとアンニーとは誰も引き取らうといふものがなかつた。ジミーはかよわく傴僂で、杖なくしは 歩けぬ 五歳の兒であつたし、アンニーは十歳であつたが、傍若無人のかたいちものので、その上、トラホームを病ひ半盲であつたのである。此アンニーの眼病は後年長く煩ひの種子であつて、幾度か手術を受け、一時快癒しても、ともすれば再發の患があつたやうである。「もしあの子が眼がわるくなかつたなら、さぞきれいな子だらうに」とは近所の人々の噂する所であつた。

此二人の姉妹は新くして遂にテユウクスベリーの貧窮院に收容せらるゝことゝなつた。これが一八七六年二月廿二日、丁度ワシントンの誕生日のことであつた。

3

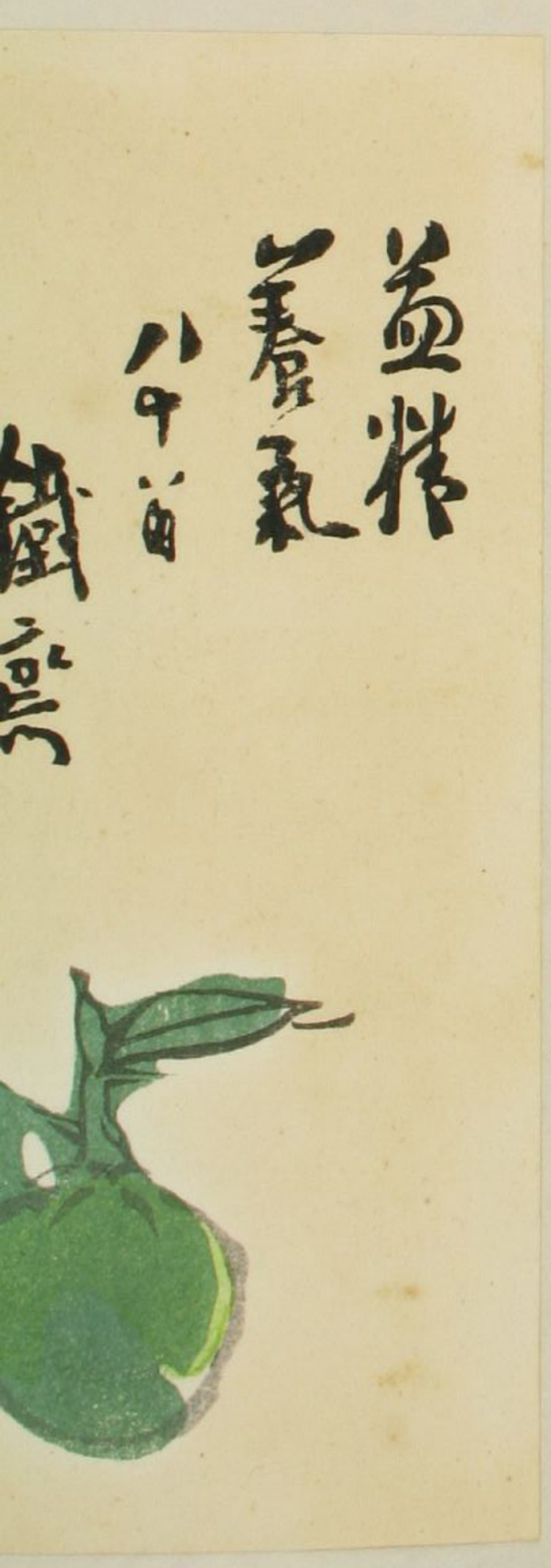
テユウクスベリーの貧窮院は州立であつたが、その設備からいつても、その待遇から見ても、丸で地獄同樣で、その死亡率の光景などは思ひ出しても身の毛のよだつやうだと、サリヴアン女史は後にいつてをる。幼少のアンニーとジミーとはこゝに收容されたが、ジミーは間もなくこゝで死亡した、この時は流石のアンニーも始めて肉親の愛と悲しみとを經驗したとのことである。

アンニーは眼の治療のためにあちこち轉々したが、遂に親切な人の世話によりてボストンのパーキンス盲唖院に入學することが出來た。これが一八八〇年の十月七日でアンニーは十四歳、ヘレンケラーが生れて三ヶ月の事である。

十四歳にして自分の名さへ綴ることを知らなかつたアンニーの修學は隨分みじめなものであつたが、例の負けに魂でやり通し、眼病も快癒して印刷せる文字を讀むことができるやうになり、二十歳の春には、このパーキンス盲唖院を卒業することゝなり、而かも男生四名、女生四名の同級生中、最優等の成績を以て、晴れの日には卒業演說をなすの光榮をさへ得たのである卒業するや丁度、ケラー家よりの招聘狀に接したので、直ちにそれに應じ、南方アラバマに赴き、ヘレンの家庭教師となり、四十有余年の間、全く獻身的に盡瘁して世界稀有の奇蹟を顯はすに至つたのである。その間の懇篤たる苦心血の滲むやうな努力は教育精神そのものゝ具化であり、模範である

ヘレンに接してから僅かに三月、ホプキンス夫人に與へた手紙に左の語がある。

私は彼女（ヘレン）が著るしい能力を有つてをる事を知つてゐます。私は之を發達させ、ものにすることができると信じます。私は如何にして此等のことを知つてをるかを申上げる事はできません。少し前までは如何してよいか何の考へもつかず、丸で暗中模索の有樣でしたが、併し今はそれが分りました。それを說明する事はできませんが、困難が起りましても、當惑することも、疑ふこともありません。私は如何に、其困難に處して行くかを知つてゐます。ヘレンに特殊の要求が起れば、それが自然に私の心にむかつてくるのであります。實に不思議な事です……

正に教育の神髓に達したるものと謂ふべきである。如何にしてこの如き境地に達し得たかは實に研究に價する一大秘密であると思ふ。

【寫眞は右サリヴアン、左ケラーの兩女史】